《ロンドンからのたより（両親宛）》　・1973b

～児童養護施設【ホリス】見聞録～

1973年6月12日　　＝速達＝

お父さま＆お母さまへ

ご心配いただいておりますでしょうが、私の方は、お蔭さまでめでたくランディングというか、ロンドン中央からテムズ河を越えて遥か南に下った、Kent 州 Sidcup の【The Hollies】に辿り着きました。空気が澄んでいて美味しいのは抜群！広々として気持ちが清々して、ほんとまさに別天地です。

【ホリス】という児童養護施設はとびっきり広大なる規模の敷地です。かつての或る貴族の領地跡なんですって。それが買い上げられたのは20世紀初頭以来の「貧民救助法」の施行の実績らしい。そこから紆余曲折を経て、現在ではサザーク自治区議会が管轄している。どうりで正面玄関の門構えも凝った造りで、門衛の詰め所もあって威風堂々で、統括本部のあるオフィスをはじめとして、敷地に点在する全ての建物がチューダー様式というらしいけど、その名残りを留めており、いかにも時代がかってるわけなの。共同の給水塔やら洗濯場の設備があったり、他にも体育館やら温泉プールがあったりして、一つのコロニー（群落）というか自治共同体なのです。

敷地内に20幾つかのコテージと呼ばれる家々が点在しているの。小舎制というらしく、それぞれの家にハウス・ペアレントと15～20名ほどの子どもらが共同生活をしています。とても素敵に思われたのは全てどの家には樹木に因んだ名前が付いているの。ブナ、ニレ、それにアカシアやら・・。「ビィーチ（ブナ）」という家が当面私の仕事場です。「オーク」はスタッフの家で、そこに私の寝泊りする部屋があるのです。

昨日から正式に働き始めたのですが、その2日前から観察も兼ねて子どもたちと寝起きを共にしておりました。徐々に【ホリス】の概観が掴みかけてきてるんだけど。面白いことに、それぞれ独自にハウス・ペアレントの躾けというか教育方針があるみたいよ。厳格な躾けを重んじるところもあるとかだけれど、うちの「ビィーチ」の場合ですと、最大限の自由を子どもらに与えてるの。実にハウス・マザーの裁量一つというか、その性格如何に大きく依るものと窺われました。ここ「ビィーチ」では食糧はふんだんにあるので子どもらは好き勝手に食べ放題なのです。全体に皆が皆、子どもらもスタッフらもリラックスしている印象です。Mrs.ディ（ジェーンと呼んでいる）がハウス・マザーで、彼女を中心にマンディ（女の子）とトムとニック（男性）と私が‘ハウス・スタッフ’で、他にパートでお掃除やらお料理の手伝いやら‘キッチン・スタッフ’が5人ほど来ます。あと1人、夕方遅く子どもの世話のために女の人（パット）が来ます。

私の働くタイムは、月曜：7～12・6～10、火曜：12～9、水曜:7～4、木曜：7～4、日曜：12～9で、金曜と土曜がお休みです。週45時間労働ですが、たいして重労働ではありません。スタッフは皆いい人たちです。

私のやることは子どもの側にいて適当に喋ったり遊んでやったり、手を貸してやること、朝子どもが学校へ出掛けた後、それぞれの部屋を適当に片付けて、洗濯物を収集すること。子どもの食べた後を適当に片付けることなどです。全然何々しなければならないことは一切なく、皆が皆適当に動いているのです。一生懸命やっても誉められるわけでもなく、ボォーとしていても怒られるわけでもなく、今迄のこと思ったら気侭すぎて笑えてくるぐらいなのよ！

ジェーンというハウス・マザーは実に肩の力の抜けている中年の女性です。どちらかというと寡黙で、煙草を咥えながら、軽く微笑を浮かべて、周囲を眺めているだけ。そんな彼女に子どもらは心許しているというのか、実に大人と子どもの‘和平協定’といった感じで、悶着もなしに日々平穏なのです。

子どもらは１６人居て、おそらく施設暮らしは長いだろうと思われる１０代の男女が殆ど。一番小さいのが５歳の女の子ですし、殆ど手が掛かりません。十代前半でも男女の恋仲カップルの姿はちらほら見かけるわけ。ここ「ビィーチ」ではウェンディという１５歳の白人の女の子が睨みを利かしてて、テレビ前のソファーを陣取って黒人のボーイフレンドとお互いピタッと肩を寄せ抱き合って夫婦きどりしてる。周辺の他の家からもぞろぞろと同じ年齢層の男女がやってきて、彼らの溜り場にもなってる。物欲しげな異性愛が臭う。でも愛を求め合ってるというよりか、まるでお互いを‘抱っこ人形’の代わりにしてるような幼稚さが垣間見られてちょっと危ういのだけど・・。ジェーンは全てそれを承知の上で鷹揚に構えている。その腰の据え方は年季が入ってて、私など新参者にはとても真似しようのないものに感じられたのよ。

全体に‘擬似家族’というか、年嵩の子は小さい子の世話を当たり前みたいにしてる。ウェンディが黒人の女の子のチリチリの頭髪を三つ編み風に綺麗に編み上げてあげたりしてたよ。手際のいい慣れた手つきに感心した！まるで猿のグルーミング(毛づくろい)みたいにも見えたけど。お互いにスキンシップになってて、悪くない感じ！黒人の毛髪って放って置くとまるで雀の巣のようにモジャモジャにひどくなるもんだから、日頃のこまめな手入れが必要なの。私にはただ珍しいばかりで、勿論手が出せず眺めてるだけ。むしろいろいろと私なんか教えられてるわけなの！

私は、昨晩ここ「オーク」に初めて泊まったのですが、子どもらの声もまるで聞こえず静寂そのもの。そのうちいろんな人と知り合うと思います。私の個室はやや小さめですが、壁紙の花柄が可愛いの。明るくって気に入ってます。いろんな設備がよく整っていてスタッフの家として実に申し分なく快適に過ごせてます。

ところで、昨日『ホーム・オフィス』で滞在延期の申請手続きを済ませました。あと何年かここに居る限り、身も心も安全です。

なんとまあ今日が６月１２日ですよ。去年の今日、羽田を発ったのが夢のようです！

では又。かしこ　　千鶴子より

《 新住所：c/o The Hollies (Oaks),
Burnt Oak Lane, Sidcup, Kent, England 》

1973年6月15日

お父さま＆お母さまへ

すべて快適に順調にいってます。今日と明日とが休みなので、部屋を片付けたり、シドカップ駅付近まで買い物に繰り出したり、近くの公園を散策して、時折日光浴したりします。スタッフ同士の顔見知りもボツボツ出来てきたの。ベトナムから来た女の子とか。今日の昼は「オーク」(スタッフの家)で食事しましたが、ここの食事は「ビィーチ」もだけど、本当に美味しいのです。それにここの舎監の Mr.&Mrs.アダムズ夫妻とご一緒にお喋りしながらだから、快活な雰囲がとっても好ましいのです。皆いい人たちで気持ちが穏やかになるのです。ミセス・アダムズは70代後半のかなり年輩のご婦人で、おそらく彼女はご主人のミスター・アダムズとご一緒に【ホリス】の歴史に多大な貢献をしてこられたものと推察されます。世のため・人のための眼差しを持ちながら、しっかりと根を下ろして生きてきた人の穏やかさと緩やかさが体中に溢れている。彼女が私に、＜そのうちもっと大きな個室が空いたら移れるからね＞って約束してくださいました。心配りがほんとうに優しいの。日本から英国に今着いたばかりのような気がします。そうだといいのにと思ってしまう。去年1年間の此地での不本意な暮らしがまるで嘘のようです。そうは言っても、あの1年があってこそ今現在のここでの出逢いが実現したとも言えるわけで・・。複雑です。20日が初めてのお給料日なのです。それから、いつかの晩「オーク」の居間で他のスタッフと語らっていた折、ついでに私の部屋に飾ってあった和紙の人形やら家族の写真やらお見せしたのです。誰しもがすごーく感激されましたよ。嬉しいわね！

ではいずれ又。　　千鶴子より

1973年6月19日

お父さま＆お母さまへ

この頃の気候はまるで日本の初夏のように暑く、よく汗をかきます。英国では珍しいお天気続きなのです。日陰は風が気持ちよく吹きますし、芝生に寝転がると悪くない気分です。

ここでの生活も1週間過ぎて、落ち着いています。昔のべつ何かしら屈託を抱えていたせいか疲れやすかったのが嘘みたいで、この頃は全然疲れを感じないのです。実際、ちょっと張り切って仕事をした後は、椅子に座ってお茶を飲んで休憩するとか、誰に気兼ねすることもなく、自分の体を自分でコントロール出来るからかしらね。子どもらのフットボールするのを芝生に座って眺めていても一応監督していることになるし、テレビを子どもと一緒に観ていても、そういう意味になるし、とにかく側に居てやって、必要な折に手を貸せばいいのですから、殊更に緊張を強いられる感がなくて助かっているのだと思います。

それに、うんと嬉しいことが一つあったの。先日、【ホリス】のグランドでフェート(お祭り)があって、「ビィーチ」の子どもらと出掛けたのよ。随分と大掛かりな趣向を凝らしたお祭りで、子どもらは大喜び。地元の人たちのご支援もあって、

随分と盛り上がってた。それに勿論、資金集めでもあるからバザー提供品もいっぱい出揃っていて、

私も人混みに揉まれながら、物色してたわけ。ふとベージュ色の糸で編んだハンドメイドのテーブル・センターが一つ目に留まったの。波状のパターンが綺麗で、小ぶりで使いやすそうだったから買い求めたわけ。そしたら横合いから中年のご婦人が＜それ、私が一生懸命かぎ針で編んだのよ＞っておっしゃるの。クロッシュレース編みっていうんですって。早速、素敵だって誉めて、サンキューってお礼を伝えたの。あちらも満足げだったけど、私も嬉しかった。ちょっとお値段が安すぎて恐縮しちゃったけどね。すごい手間掛けたに違いないもの。こういう巡り合わせって不思議！‘一期一会’っていうのかな・・。

ところで先日、ミスター・シンクレアが私を訪ねて来られました。彼は【ホリス】ではスタッフらの監督者（superintendent）なんだけど。本来私は「シダー」という家へ行くことになっていたのだけど、彼の休暇旅行中に、「ビィーチ」に間違って配属されちゃったのだって。だから今週末には別の家へ職場が変わります。そこは女性のスタッフが足りないのですって。私は何でも経験だと思って、まあ言われるままになっています。「ビィーチ」のスタッフは皆本当にいい人たちで、私はかなり慣れて親しみを持ち始めていたのだけど。躾けとかルールとか殆ど皆無な状態で、食べた後は放ったらかし、汚れた服は脱いで放ったらかしで、私は少々疑問を持ち始めていたのです。２０近くもある家々の中ではもっとも乱雑な家だろうと思います。気に入らないのは、子どもの服装で、ボタンが取れていても穴が開いていても平気で着ているの。だからこの頃私は神経質に繕い物ばっかりしてたわけ。洗濯やアイロンの掛け方もどうでもいい調子で適当だから、いい服でもすぐにみすぼらしくなる感じで、大人（スタッフ）の生活態度みたいなものが問題じゃないか、少々リラックスしすぎていないかなって思い始めたところなのよ。

オランダから来たビルギットの居る「ローレル」の家では、子どもの躾けが厳しく、服装もそりゃあ気を付けて、きちんとしたいい服を着せているって聞いてたんだけど。但し、１８歳にもなる子どもの入浴の世話をスタッフがするって。それって接触を必要としているからだとかいう理由だけど、おっかしいと思うのよ。とにかくそれぞれの家の特徴があって、‘百聞は一見に如かず’ってことよね。面白いのです。次の「シダー」の家は、外観からはまずまず上等かなって趣きではありますけど・・。さてさてどうなることやら？！

ところで、ここの「オーク」の家に居る限り、静かに清潔にしていられるので、私はすっかり落ち着いています。身奇麗にしてますのでご安心ください。この頃では食べ物が美味しくってよく食べれるものだから太っちゃいそうです。それから、今日からピアノを弾き始めました。ピアノと教本があって、たまたま弾き始めたら面白いの。何でもやれるって嬉しいものだね。別の家で働いてるノルウェーから来た女の子は乗馬を習っているって！私もそのうちやろうかな。ここの敷地内にプールがあるし、まずは水泳かな。いずれボチボチだけど挑戦してみます。かしこ　　千鶴子より

1973年6月22日

お父さま＆お母さまへ

英国では薔薇の季節を迎えてます。

ここ【ホリス】の敷地内でもあちこち庭師たちの日頃の手入れが良いもので薔薇が見事に咲き誇ってて、散歩していても嬉しい愉しみです。ここスタッフの家（オーク）では、舎監の Mrs.アダムズがそこらじゅうに薔薇を飾ってる。とにかくこっち風の活け花っては花瓶にもっこり盛るって感じなので、幾つ飾ってあってもおかしくないし、まるで華やかで心和みます。ミセス・アダムズはまことにさばさばしたいい方なの。ちょっと顔を見ない日があった後など＜どうしてた？＞って私の手を握りしめ、まことに優しげに心配して下さって、温もりにすっぽりと包まれるようなの。此処【ホリス】で多くの歳月を通して、どれだけのホリスの子どもたちに慕われてきたか。おそらく彼女は誰にとっても‘永遠の Mum(おかあちゃん)’なんだろうなと思ったのよ。素敵よね！

「ビィーチ」を去って、別の家「シダー」へと変わって４日目だけど、いろいろと勝手が違うので戸惑っていました。子どもらは１０人で、小学校の年齢です。家の規模は「ビィーチ」に比べればやや小粒で、スタッフも少なく、前はたくさんのスタッフと子どもら(大きい)の中で、騒々しくがやがやと賑やかにリラックスしてやっていたけど。今度は私が軽い料理とか作ってやったりしなくちゃいけなかったり、かなり忙しくやってます。ミセス・スチュワートという人がハウス・マザーだけど、かなり小うるさく子どもを躾てるみたいです。お茶の片付けを当番制にしたり・・。皆子どもたちはそれでもよくやるのでいじらしいような気持ちです。部屋部屋はかなり綺麗で、プレイ・ルームもレコードや本がきちんと揃っていたりだから、一応見掛けは悪くありません。子どもたちは3つの家庭から来てるとか。姉・弟、兄・妹です。皆それぞれ親(片親)がいて、でもいわゆる養育不適格者みたいで、なんと云うか子どもを育てる責任から中途半端に逃げているという具合で、それだけ子どものフラストレーションは強いと思う。それでも皆白人で、「ビィーチ」に居た黒人の小さいのに比べれば、概して気質は穏やか、悪くないみたい。でもやっぱり甘くすると、悪ふざけするの。

それで思い出したのは、或る日本企業のロンドン駐在員の奥さんが言ってたよ。子どもさんが地元の学校に行っているんだそうだけど。＜こちらの子どもらは普段親に苛められているから、ちょっとこっちが甘くすると、程度を知らずに付け上がってふざけるんですよ＞だってさ。英国では、例えば子どもが泣くとすると、泣くのを止めなさいと言って叩いて止めさせるとか。日本風の＜いい子だから、泣かないの＞なんてふうの優しい言葉掛けは期待もできない。そもそも無益ということらしい。母子関係ってはどうやらかなり硬直ぎみみたいだよ。私も覚悟しなきゃね！

特にこんな施設に預けられれば否も応もなく自己主張は制限され、子どもは日常的にやはり我慢を強いられている。

今日、実は「シダー」の子ども２人を連れて、近くの小学校のグランドで子どもの**《仮装大会》**があると聞いて、見物に行ってきたの。

仮装はそれぞれてんでに思い思いに趣向を凝らしてて、皆可愛かったの。でもそうした賑わいの中で、ふと【ホリス】の子どもたちはこんな風に子どもにいくら金を掛けても惜しくない親の想いというものを知らずに育ってゆくんだと気付かされ、ドガンと落ち込んじゃったのです。実は今朝、ミセス・スチュワートはご主人と自分の２人の子どもを連れて８日間のスペインでのホリディ(休暇)旅行にさっさと行ってしまったのです。それは彼女の権利なのだからとやかくは言えませんし。でも何かしらここ「シダー」の子どもらが捨て置かれたみたいで可哀想なもので、ちょっと僻んだりしないかと、それが怖いの。でも実際のところ、皆むしろちょっぴりリラックスしてるみたいなんだけどね！人生の不公平を恨んでも始まらないとして、子どもらがどうそれに耐えてゆけるんだろと煩悶しつつ、私自身の立ち位置をも模索してるところです。とにかくいい経験をさせてもらっていることは間違いありません。

では又。かしこ　　千鶴子より

1973年6月29日

お父さま＆お母さまへ

昨日と今日は仕事はオフですので、久し振りにくつろいでのんびりしてますが、雨続きでちょっとじめじめしているのです。

さて、私の方はすっかりここ【ホリス】での生活にも慣れて、英国滞在も１年を越えたわけですし、ここに至って急いで何々しようって焦りの気持ちが全然なくなりました。ホリスの生活は‘学びの場’として断然言うこと無しなのです。

「シダー」の家の子どもらは９人で、それもまだ小学生ですし、手足が悪いわけじゃなし、知能が遅れているわけじゃなし、そういうことからすればお世話するにしても楽で楽で仕方ないって言えるのかも知れない。一人ひとり子どもの家庭背景はよく知らないけど、比較的ノーマル(正常)だと思うし、今のところ扱いに手こずることなぞまるでありません。

でも幼い身でまったく赤の他人のケアに委ねられるってのは残酷だと思う。それに親が決して自慢できる親じゃなし、どんな気持ちでいるのかしらと子どもらが憐れでなりません。でもね、実際問題、他人の子どもに我が子を思うような親の心遣いをするってことは本当に至難のことなのだと、この頃つくづく思う。この前爪切りを買ってきて、子どもら皆の指の爪切りしてやったんだけど。殆どが皆、常日頃どうやら歯で爪噛みして伸びた爪をひんむいていたような趣きで、私はもうドカーンと悲しくなったの。

お風呂にも一人で入れないことはないけど、やっぱり側にいてやって、話してやったり背中こすってやれば、ずうっと子どもは嬉しいに決まっているし。折鶴をつくってやって遊んだり。一人ひとり興味・喜びは違うので、まあ個別的にその子の喜ぶことを見つけるように努めて公平に、飽くまでも公平にと心掛けています。

今は薔薇の時期なので、そこらの花壇に咲いている花を切ってきては子どもらの共同寝室に飾ってやったり、なるべく居心地よくしてやろうとしています。今のところ私は新米なのだし、他のスタッフのやるのを眺めながら、自分のやれることをなるだけ積極的にやってます。

子どもは、特に大きな子どもは私が英語が聞き取れず解んなくても苛立ったりせず、かえって親切に教えてくれたり、日本のことを質問されたりで、少しずつ馴れ親しんできてますし。或る男の子なんて、盲腸の手術で病院に１週間居たときに、下の弟や妹らと一緒にお見舞いに行った折に私が遊んでやったのがよっぽど嬉し

かったのか、それ以来私の顔を見る度に相好を崩し、笑いが止まらないといった変なことになっちゃってて・・。ややもすると欝的に惨めになりやすいことだし、笑えることがあるってのはいいものだと思うのね。そんな具合で、私は精一杯のことをしているのです。

他の家のスタッフたちとは、ここ「オーク」で少しずつ顔なじみが増えてるの。皆すごく親切です。特に男性スタッフが優しいの。それから、つい先日、日本から届いた小包みの中にあった「姫鞠」やら和紙人形やら彼らにも見せたんだけど、誰もが感嘆して＜なんと賢い！＞って褒めちぎるわけ！まったく‘賢い日本人’を売り込んでいるのです。では又ね。

かしこ　　千鶴子より

. . . . . .

1973年7月9日

お父さま＆お母さまへ

ここずうっとご無沙汰しております。すみません。その後、お蔭さまでここ【ホリス】での生活も軌道に乗って順調に暮らしてます。

せっかくここでいい経験させてもらっているのだし、やはりいろいろ‘英国流’というのが今ひとつ呑み込めず困惑させられることも多々あるわけですから、いずれ私にはスーパーヴィジョン（有料の個別指導）が必要に思われます。「タヴィストック・センター」の Mrs.ハリスにもご相談したのですが。日々の【ホリス】での子どもらについての観察資料を提示して、コメントを戴くのですけれども。新たな視座を得て、ご支援いただけることがやはり大きな励みになるに違いないのです。今からその覚悟で仕事に取り組んでおります。ぼつぼつ専門書も読んで、そういうことに頭いっぱいで、ついつい日本へ手紙を書くという余裕がなくなるわけ。あっちこっちにご無沙汰続きで、つまりはそれだけようやく私の生活の軸足が此地に根ざしてきたということになりますよね。‘日本恋し病’をどうにか脱却したみたい！

この前お届けいただいた小包みのお礼をもう少し詳細に書かねばならないと思っていたのですが。殊に1万円札が1枚こっそり写真の間から見つかった時は興奮して大笑い！日本のお金って懐かしいのです。大金貰ったという感じなの！

ところがもっと可笑しなことがあったのよ。つい最近のこと、ロンドンのチェリング・クロス駅近くの有名書店フォイルズ（Foyles）に専門書が置いてあるので時折訪ねるんだけど、本をあれこれ物色してる最中に棚の本の蔭に革の財布が見つかって、中味ヒョイと覗いたら、なんと日本の一万円札がごぞっとあって、それから他に英国のやら外国のもちらほら。英国のお金見てもドキッともしないのに、日本の札金を見たときにはボォーとしてドッキドッキだったわよ。ロンドンでは見つけた他人の財布は自分の懐に入れるのが常識だけど、何しろ状況が有名書店だし、近くに日本人旅行客に名の知れた高級ホテルがあるのだし、たぶんその誰かさんなのだと思って取り敢えず店員に手渡したわけ。向こうもびっくりして、私にぺこぺことお礼言ってたけどさ。ドッキドッキしただけバカバカしい気がしないでもなかったのだけど。まあいつかいいことがあるかなと思っていたら、翌日公園のベンチで本を夢中になって読み耽っていてついうっかり傘を置き忘れて、その1時間後に慌ててベンチに戻ると傘はもう消えていたという始末・・。世の中の事情というものはまったく思うとおりには行かんものです。お陰で飽き飽きしていた傘と別れ、もっと見栄えのするいい傘を買ったので結果的には悪くありません。

ここでの生活は何ごともいちいち成る程なあと見聞しているつもりでいます。でも子どもとは以前よりも踏み込んで関われるようになりましたから、ひじょうにうまくいっているのです。時には怒鳴りつけたり、私もかなり気が強くなったけど。子どもは敏感だし、こっちが本当に思ってやっているということが解れば、大して扱い難い荒れた行為も無いのです。スタッフと子どもの間にも、好き嫌いやら相性があって面白いです。今のところ、他のスタッフとはいい線いってるのです。おかしなことに、その例外がミセス・スチュワートで、ひどい曲者なのです。１年半ぐらい、「シダー」のハウス・マザーをしているということですが、子どもらは皆彼女を嫌っているし、スタッフは思っていてもどうしょうもなくて口を噤んでいるわけ。彼女は太っているからか、全然働かないのです。台所で自分のご主人の分を作った後始末もしないとか。とにかく料理をしたがらないし、しても下手だし、のろまだし、２人の自分の子どもを他の「シダー」の子どもたちとまるで区別するのです。ご主人がこれまた奇妙な人で、全然誰とも関係したがらず、ハローの挨拶もしないの。まるでセンス(常識)の無い人たちです。でも彼らにしてみれば住居費や食費はタダだし、ここの生活は悪くないのでしょう。私は出来るだけ無頓着でいようと思うけど。「ビィーチ」ではひどくいいハウス・マザーだったし、残念なのです。他のスタッフは学ぶところがある、いい人たちですので、今はこの事態を静観してるところなのです。では又　　千鶴子より

1973年7月20日

お父さま＆お母さまへ

　　そちらはあじさいの季節になっているでしょうか？ここ【ホリス】の敷地内に限らず、この周辺にはあちこち緑地が拡がっていて、池の畔にはさまざまな花が咲き誇っていますから、この頃は活け花をする気が断然起こってきて散策に出掛けると必ず花を摘んできます。あとで花瓶に活けて飾ると人々はうんと喜ぶのです。ちょっとしたことでも人の気持ちというものは違うものなのです。気持ちよく暮らす術というものは必ず貴重視されるものですから、私もお母さまぐらいに花を活ける愉しみをもっと早く気付いてたら良かったと思ったり・・。こちらの花屋さんで花鋏やら道具は買えることですし、これからは自己流で大いにやろうと思ってます。日本を去る前に買っておいた活け花の本をいずれこちらに送ってもらおうかなとも思うのです。

　　それから、身辺に変化がありました。私は「シダー」から別の家に移りました。「シダー」に3週間居たけど、ハウス・マザーがでたらめな人で、もうとっても子どもの世話に責任持てないと思ったし、子どもらは可愛いけど、私のエネルギーからして少しも建設的じゃないし、スタッフは蔭でひそひそやってるし、そんな雰囲気に到底我慢できないと判断して、ミスター・シンクレアに移転希望を申し出たの。ところが彼は既に私の他に2通（ここ1ヶ月以内に去った人たちから)苦情の手紙を受け取っていたの。そんなわけだから、早速に「シダー」に視察にお越しで、それぞれのスタッフから事情聴取して、翌日ミーティングが設けられたわけ。彼の意気込みたるものやまさに真剣で、私たちスタッフも本当の事を言

う覚悟を決めて、ミセス･スチュワートを交えた席で総てぶちまけたわけ。ところが彼女の態度たるや、口達者なものだから、反省するどころか弁明ばっかりするし、言い繕ったり、時には嘘ついたり、皆呆れるばかりだったの。ミスター・シンクレアはひじょうに怒って、この家は‘ごみ溜め’だって言い放つ始末！その結果いろいろあったけど、私について言えば、ミスター・シンクレアの奥さんがハウス･マザーしてる家への移動を手配してもらったわけで。今日で勤務は3日目なのです。

　　今度の職場は、【ホリス】の敷地からちょっと外れたHalfway　Streetにあって、その番地が名付けられている「エイティ（80）」と呼ばれる家です。私には転属3つ目のコテージだけど、まるでそれぞれがあまりにも雰囲気も養育スタイルも違うので戸惑うこと頻りなの。ミセス・シンクレアは赤ら顔のちょっといかつい感じのご婦人で、言うなればこの道一筋の‘信念の人’なのでしょうけど。肩に力が入り過ぎかも・・。ちょっと強面（こわもて）というか権威主義的な印象なのよ。どことなく人を萎縮させたり畏怖させるものがある。おそらく意図的に敢えてそうしてるんだろうと思うけど。ただ設備やら子どもの服装・食事の管理などは万端申し分なく、ミセス・シンクレアが真剣にがっちり子どもらの‘更正’に取り組んでいるのが解るし、学ぶことが多いのは確かと思われます。とにかくいかなる事態に遭遇しても、私はいい経験してるんだと思うことにしてます。

　　それから此の度は、一つ嬉しいオマケがあったわよ。「シダー」の家で一緒だったスタッフの一人で、22歳のレズレイという名前の女性とひじょうにいい友だちになりました。どんな時でもなにかしら希望はあるものなのよね！

　　では、かしこ　　千鶴子より

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1973年7月25日

お父さま＆お母さまへ

　　私の方、その後順調にいってます。児童養護施設ってのは、日本では憐憫の対象になるものだけど、此国では胡散臭いものと思われがちです。生育歴においてひび割れを抱えた子どもらが収容されているので、ややもすると非行に走りやすいものだから、よっぽど手綱を引き締めてかかる必要があるんだそうな。ミセス・シンクレアの基本的姿勢はそういうことらしい。20名も越えた大家族では尚更のこと規律は重んじられるべきだろけど。古参のスタッフなど躍起になって子どもに有無を言わせず服従させようとする。威嚇し怒鳴りつけるやら小突くやら。意のままにならないとますます態度を硬化させ、緊張やら鬱憤を子どもらにぶちまけるわけ。傍で見ているだけで私はほとほと疲れを感じずにはいられない。これじゃまるでいかにも‘更正施設’って印象です。ほっと気を緩めることがないの。これじゃほんと子どもだってやりきれません。スタッフ同士でも堅苦しい上下関係があって、私は新参者なので上のスタッフに言われるままに仕事をこなしてます。ちょっと‘軍隊調’なのが気掛かりなのね。でも上からの指示に従えばいいだけなのも案外気が楽なのかも知れないと当面は割り切ることにしてはいますけど・・。

　　前の「シダー」の家では、手の下しようが無いほどいろんな意味で乱脈経営だったから、あれやこれや対応に苦慮することがあり、例えば夜間にお腹がすいたと訴える子どもがいたりで、仕方なく埋め合わせに私が自分のポケットマネーを散財してクッキーを買い与えたこともあったの。だけど9人の幼い子らでしたし、皆惨めな思いをしていたし。憐れみも手伝って頑張らなくちゃって思いがあって、やはり張り切っていたと思います。

でも私一人がどう足掻こうにも結局はハウス・マザーの人間性とかで左右されることですし、私はこの事態を抱え込まないほうがいいと判断し、別の家へ変わる決意をしたのでしたが。まだまだ此地で私は依然として一人前には程遠く、運営が一応軌道に乗っている職場で上からの指示に従い、下働きする程度が無難とも言えますし。抱え込みすぎたり、踏み込みすぎたりで自分がむしろ過度に消耗しないように留意しつつ、彼らのやり方をじっくりと注視してるところです。

やはりどの国でも同じなのかも知れないけど、いい人ってのは少ないものです。でもここ【ホリス】へ来てから時々珍しくもそうした人と知り合うようになりました。「シダー」へパートタイムで来ていたレズレイという女の子（結婚していて大學出たばかり）がとっても教育熱心な人で、私に英語のレッスンをしてくれることになって、それからケーキ作りとかギター演奏とかも、たくさん学ぶことが出来そうなのです。彼女のお父さまが仕事の関係で南アフリカに赴任し、幼い頃３年間あちらに居たそうで、異国に暮らすことの心理状態を解ってくれる人なのです。すごくラッキーなのです。では又。かしこ　　千鶴子より

. . . . . .

1973年8月5日

お父さま＆お母さまへ

先日のお母さまからのたよりで、皆それぞれ夏の暑い中を忙しく暮らしている様子が窺われました。Ｓ子夫婦がジュンちゃん連れて海水浴にやってきたんですってね。舞鶴の我が家がいつか将来赤ん坊の笑い声に満たされるなんてこと有り得るのかしらって考えていたのが遠い昔々で夢のようです。まったく人間が生きている、生きてゆくってことの不思議さ、おかしさってものをつくづくと思う今日この頃です。

先日「タヴィストック・センター」からの書簡で１０月からのトレイニングの計画表が届きました。私の名前がセミナーのグループの１人として載っているのを見て、全てのことが嘘じゃなく本当なのだって安堵したわけ！いろいろな思いが込み上げてきて感無量になりました。手元に保存してあった《ハムステッド・クリニック》のリーフレット、それに渡英する前に英国で就職できないものかとあちこちに問い合わせした当時の書簡をもさっぱりと片付けました。海のものとも山のものともつかない自分の未来を暗中模索していたあの当時の切迫した気分をもう一度噛み締めて、自分がここにこうして生きているということの不思議さを思うのでした。誰にどう言われたわけでもないのに、何故そうしなければならないかのようにがむしゃらに突進してきたのかしらと思うけど。自分を信じ理解し、本当に自分を生かす道はやはりここに至る外なかったのだと再確認する今日この頃です。

お父さまやお母さまには日本で初めての児童分析家になるとか、トレイニング修了後の地位とか業績とか、いろんな野心めいたことを伝えたけど。それはまるで本当なのだけど、私の中には男の人が往々にして抱く立身出世のような野心めいたものは微量で、唯そうするのが自分の使命のような、唯黙々とベストを尽くすような思いがあるだけなのです。自分だけのことを思えば、外国人の中で一人で暮らすことに疲れて、もう厭だ、帰りたいと泣き出すことが今でもあるのだけど。気持ちが落ち着くと、自分はやはり幸せ者なのだと思い直して、誰にでもいつも幸せそうだと言われるような振る舞いが出来るのです。有り難いことにどうすれば幸せでいられるかについて自己洞察するだけの賢明さがあるわけで、いつもいつもそのように見られる程に幸せな気分でいるとも言えないのが実情です。

しかし、想うに今後の生活は、本当に自分が長年心に描いてきただけに張り切りようが違います。これ迄いろんな人に出逢って、自分で言うのもおかしいけど私ってひどく人間が‘高級’なのだって知りました。言い換えれば、繊細（ナィーヴ）というかヤワなところがあって、まるで世俗には不向きやわ！自分を駄目だなって嘆くことがしばしば。このままでは自分の運命を担えないと秘かに憂えてたの。そんな私がそのままに自律的な秀れた人を目指してゆける環境を此地で得たことになるわけだから、私はただもう有り難いと思ってます。

ここの「オーク」では、他のスタッフと語らいをすることが多く、卓球したり、ビリヤードをしたり・・。今日は日曜日で、２人の男性スタッフとロンドンの有名な寺院へミサを受けに一緒に出掛けてきたとか、少しずつ生活に余裕が出来つつあります。【ホリス】ではあちこちでハロー！の挨拶程度にしても子どもたちと顔見知りになり、経験としては実に面白いです。子どもとお喋りできる機会が持てていることにまず感謝してます。

ただ、お給与の面ではやはり決して高額ではなく、税金とか寄宿費とか半分以上も差し引かれるわけで。手取りが週給で１４ポンド近くです。この物価高では、トレイニングを受けにロンドン中央へ通う交通費を考えると、決して余裕があるとは言えないのが実情です。実際、頻繁に【ホリス】ではスタッフが入れ替わって、２，３ヶ月とか、６ヶ月とか１年とかで皆それぞれ次のいい就職口を得て去ってゆくのです。私も何ヶ月後かには真剣に転職を検討せねばと思ってます。それで思うに、親には出来るだけ金銭的援助を受けない覚悟でいたのに、１０月になる迄にたぶん「タヴィ」に授業料２２５ポンドを納入するのに、どうしたってその工面が出来そうにありません。いつぞやお父さまが援助をしてやると言ってくれたとのことですが、改めて本当にお願いしなきゃならないようなのです。私は自分のこと自分でずる賢いなって、まるで両親を罠に嵌めたみたいな気がして、内心この頃頻りに気が咎めてならないのです。帰国後には恩返しするつもりでいますし、確実にそう出来る自信があるからお願いするわけでもあるのですが。なんと云っても何年も親許を留守にするわけですし。よくよく考えれば、親としてはどえらい厄介な娘を持ったことになるでしょう。しかしまあ私の苦労を少しでも軽くすると思って、実際にその援助なしでは夢も挫折するしかないみたいなのが本当なのですけどね、どうぞ宜しくお願いしたいのです。

ところで、お母さまは外遊の夢を大いに膨らませている様子ですが。何でも珍しいものを見聞きすることはそれこそ生き甲斐というものですし。欲するならばよけいに愉しみになるものですから、何年後かには必ず実現すると思って、大いに夢を描いていてください。勿論私も同様に励んでまいりますからね。

さて、ここ【ホリス】の子どもらは夏にはキャンピング・ホリディに出掛けるのが恒例なの。「８０」の家では今夏、イギリス海峡のチャネル諸

島のうちの一つ、ジャージィ島（英国属領）行きを計画してます。私も２０名ほどの子どもらの付き添いで3週間あちらでキャンプ暮らしです。子どもらはもう興奮して浮き足立っています。私は海辺で砂遊びするのも悪くないかなと思ってます。写真をいっぱい撮ってきます。美しいところなのだそうです。かしこ　　千鶴子より

1973年8月15日

お父さま＆お母さまへ

ここジャージーで、子どもらと一緒に寝泊りしている丘の上のキャンプ場から海岸沿いの道を湾の方へ降りてビレッジに出てみると、何やら旧い教会があって、ふと気まぐれに立ち寄ってみたら《花と音楽の祭り》開催中なんだとか。セント・ウェン（St.Ouen）教会といって３世紀以上も経ってるの！この偶然の出逢いにはもう感激！言葉では言い尽くせません。人々と交わって、地元の人やら観光客やら皆の幸せそうな顔に囲まれ、音楽に聴き惚れて、英国では経験したことのない極上の（花を、音楽をそして神を愛でる人々の）、それでいて快活で穏やかな人々の暮らしぶりを本当に心から羨ましく思ったのです。

気候温和なリゾート地で、英国属領ではあるけど、現在もノルマン系の住民が多く、フランス語が常用されているんだそうな。畑で耕作していた農夫がベレー帽被ってたよ。おしゃれ！って感じよね。それに乳牛ジャージー種の原産地だとか。牧草地に放牧されている乳牛が草を食んでいるのをあちこち見掛けたけど、大きな黒い瞳がとっても可愛いかったの！この土地柄にはもうすごーく愛着を覚えました。

では又。　　千鶴子より

1973年9月2日

お父さま＆お母さまへ

８月２９日の夜、ジャージー島から戻り、「オーク」に辿りついたら、日本からの荷物が届いてました。旅からの帰りはやっぱり我が家でくつろぎたいものです。そういう心境だったから、贈り物がどんなに嬉しかったか！早速ラーメンを食べて、お茶を飲んで、いよいよ日本がいいなと思った。やっぱり美味しかった！！短歌新聞も読みました。お母さまのお作も読ませてもらった。なかなかに秀逸！やっぱり日本人の気持ちって、ぴったりとわけがわかるって感じ！本当に有り難かったよ！

家族皆の写真も嬉しかった！お父さまやお母さまが我が家の池の錦鯉を見ながら、‘鯉キチ’たちと談笑している姿に思いを馳せながら、幸せということの意味をしみじみと感じるのでした。何か大きな慰めを発見したのです。

さて、ジャージー島から持ち帰ったおみやげって何かと言えば、なんと小石と貝殻と松ぼっくりなのです！この３週間というもの、子どもらと四六時中一緒で、気持ちのやすらぐ暇もなく、子どもらを砂浜へ引率して海水浴をさせての日々に明け暮れして、もうヘトヘトって具合だったけど。それでもどうにか自分のタイム・オフの自由時間にはあっちこっち島中をほっつき歩き、異国情緒を満喫したことになります。

殊の外嬉しかったのは、クレブ・ド・レルクという崖下には小石の浜があって、波打ち際には御影石の小石が一面に敷き詰められてあるの。その色とりどりの小石の美しさにはもう見惚れて茫然とするほど。可愛らしい渦巻きの貝殻もそこらじゅうにいっぱい！無我夢中でビニール袋にいっぱい詰め込んで、はるばるイギリス海峡を越えてここ【ホリス】まで持ち帰ったのです。キャンプ場では松ぼっくりの巨大なのを幾つも拾ったし。スタッフ間の軋轢やらいろいろあったのに、厭なことなぞ何一つ覚えてない。心に残ったものと言えば、ジャージー島は美しかったという想い出なのですから、もう何となくケタケタって笑いたくなる心境なのです。なんら傷を負わずに済んでいる自分に、おめでとうさんですってこと！！

それから、荷物の中にあったカセットテープだけど。日本からの音楽の贈り物がどれほど慰めになるか！本当に嬉しいです。いずれジャージーの写真は現像出来次第送ります。

では又。かしこ　　千鶴子より

. . . . . .

1973年9月10日

お父さま＆お母さまへ

今週は３日間の休みがあり、ホッとしてます。「オーク」の家で他のスタッフたちと卓球をしたり、雑談ながらも折々にいろいろと有意義な話し合いをもしたり、私は落ち着いて暮らしております。どうぞご安心ください。

お届けいただいた日本の活け花の本はページにパラパラ目を通しただけですが、すっかり感激しました。なんという造形感覚でしょ！それから、音楽カセットテープはまことに堪能しました。私のかつて愛唱した曲やら、よくもまあいろいろと集めてくれたものだと感心しつつ、レコードからテープに吹き替えるの大変でしたでしょうにとお父さまの労をねぎらいながら、有り難く聴かせてもらっておりました。

それでね、ちょっと笑っちゃったの。ついこの前、近くの公園へ散歩しに子どもらを連れて行った折のこと。子どもが私のテープレコーダーにいたく関心を持つもので、私も音楽を楽しめるしいいかなと思って、一緒に手にぶらさげて持って行ったのでしたが。公園の池で子どもらが小さい魚を採るのに熱中している間、私は芝生に座りながら音楽に聴き入っていたの。《岸洋子》の愛唱歌だったけど。そしたら、人々が通り過ぎるすぐ傍で、テープレコーダーから「次は〇〇です」って曲目を紹介するお父さまのナレーションの声が流れてきたもんで、なんとなく妙な懐かしいおっかしな気持ちになりました。ここはどこだっけ？！って感じで・・。ところで、＜日本の歌はいい＞って子どもらが頻りにお世辞を言ってくれましたよ。愉快よね！

私は今、すごく嬉しい気分です。此国では１０月に大學やら研修機関のコースが開講になるため、【ホリス】に居た若いスタッフたちがサァーと消えてしまって、どこの家でも人手が足らず、まるで混乱状態のようなのですが。私もそんなことで「ラーチ」というコテージに一時的に手を貸すということで移動しました。ハウス・マザーが今のところ一人で１２人の子どもの面倒を見てるのだけど。その人は今週の金曜に別の職に変わるとかです。新しいハウス・マザーは若い人ですが、

スコットランド出身の純朴ないい人です。私はこのまましばらく「ラーチ」に居たいと願っているのですが。子どもが本当に可愛いのです。先日の日曜、ピクニックに付き添って行ったのだけど、どんなに可愛いと思ったか知れません。それぞれがぺちゃぺちゃと面白い話をしたがって、ニコニコしてるし、皆競って私に買ったお菓子を食べさせたがって、さらに驚いたことに、グリニッチ天文台で、私に絵葉書を買ってくれたの。へェーと思うほど、

独立心が強くて、しっかりしていて、それでいて子どもらしくって可愛いのです。

今からスーパーマーケットに一人で初めて家（ラーチ）の買い物に行くところ。マネージャーと交渉せんならんし、大丈夫だとは思うけど、しっかりしなきゃって、今ちょっと緊張気味です。

それからね。先日届いた小包みのことだけど、私は本当に幸せものだとしみじみ有り難く思ってます。折り紙の本は抜群に良かった！子どもらがきっと喜ぶと思うし。それから食糧品だけど、どんなに楽しんだか知れません。缶詰のお米は結構いけます。さっき「うなぎめし」食べたのだけど、素敵にいいお味だったよ。お漬物はまことにうまかったし。ラーメンは最高に良かったの。ここ「オーク」の家で、他のスタッフにも食べてもらったわけ。素敵だって皆が喜んでたわよ！

いずれ又。かしこ　千鶴子より

1973年9月20日

お父さま＆お母さまへ

琴の曲のテープに聴き惚れながら、今日は休みの日なもので、一人「オーク」の自室でゆったりくつろいでいます。

あれこれ憶うに、職場での問題というものはどこも大して違いはなく、特に私一人で意気込んで悩みを背負い込んでいるとも思えない。ただ私は問題意識を持つだけの教育を受けたということが他とは違うかも知れないわね。「８０」の家でのこと。釈然としないというか神経に障ったのは、古参のスタッフで威張っているのが教育を受けていそうもない人たちで、新参のスタッフでちょっと教育を受けた知識力のある者には、恐れと自信の無さが手伝って、有無を言わせず頭ごなしに命令するという態度に出るのです。それで私とポールという黒人の男性スタッフがちょっと‘貧乏くじ’を引いたわけ。ポールは大學へ行くというので既に去ったし、私は「ラーチ」へ移動になりましたし。今はもう万々歳だけど。ミセス・シンクレアの右腕というか補佐役の女性なんて権柄ずくで、もうひどかったの。ここは「強制収容所」じゃないでしょって、本当に引っ叩いてやろかって腹立ちを抑えかねることがいっぱいあったけど。育ちの良さ（！）が邪魔して、そういうことも無く、まあスカスカと晴れて自由の身になったのでした。ここ【ホリス】でも、面白くない思いをして働いているスタッフがいっぱいいて、殆どは上のスタッフが不必要に辛く当たるとか、難しく云えば‘人間無視’で悩んでいるわけです。自分で言うのもなんですけど、私のえらいとこは、そういう状態に甘んじず、幸せになる方向へ向かって闘うところなのです。ミスター・シンクレア（ホリスのボス！）はかなりの権力主義者だけど、どうしょうもないエゴの外に、まあ筋を通せば判るだ

けの常識が一応備わった人でもあるのです。しかしながら、此の度の彼の家「80」を去る算段では、彼の奥さんがハウス・マザーだけにかなり気遣ったわけ。【ホリス】では‘軍隊’とやら‘強制収容所’とやら悪評判で有名なの。ミセス・シンクレアの方針としては、将来一人ひとりにまともな養子先を見つけて送り出すという使命感があるみたいで、普通の家庭に適応させるべく、躾けをめいっぱい厳しくしてる。だから【ホリス】の子どもらと遊ぶことさえも厳禁にしてるから、当然【ホリス】の内輪では浮いた存在なのね。だから、ミスター・シンクレアに彼の妻を批判的に言ってもどうも気持ちよく耳を傾けそうにはないし。タイミングを掴んで、事を荒立てず、脱出することを計画立てるのに、どんなに私一人苦労したか解りません。唯、彼が若い頃、「タヴィストック・センター」のソーシャル・ワーカーのコースにいたことがあって、私を軽視できないということは無意識のうちに解っている様子があったし、ここに至って私もこのままおとなしく黙ってなぞいないという決意があったし。それがなんとなく有耶無耶のなかで‘脱出’できることになったので、私は腹の中でにんまりと笑っているのです。うまくやった！って・・。

それから、「タヴィストック・センター」の近くに就職する計画をしていたのでしたが、結局空席がなく、私はあちこち ‘放浪’するのに疲れてもいるし、【ホリス】の敷地内でちょっと歩けばあちこちでハローって気さくに挨拶を交わすような存在にもなってきているしね。幸運なことに「ラーチ」のハウス・マザーが私のトレイニングの件では理解を示してくれて、週2回の夕方ロンドンへ行くことを気持ちよく承諾してくれたし、そのような人を上司として得ることの難しさを経験上よく解ったので、私はあと一年ここに留まることを決意しています。これ迄此の国に着いて以来、よくもまあ嫌で嫌でやり切れない日々を送ってきたことか！でもそれも終わってしまえば、自分は賢く堂々とまっすぐに生きてゆく姿勢を身に付けているのですから、此地での経験に今は大いに感謝してるのです。 では又。　　千鶴子より

1973年9月22日

お父さま＆お母さまへ

【タビストック・クリニック】(子どもと親の部門)の研修コースの初顔合わせがありました。主任（principal）の Mrs. Martha Harris（マーサ・ハリス）を始めとして教官らが出揃い、私たち新参の研修生を囲んで、先輩らにも引き合わされました。人間関係を研究している人々の集まりだけに、その雰囲気のいいことはもう抜群でした。ワインを片手に、スナックをつまみながら、もう和気藹々で誰しもが熱く喋べりまくってるのでした。研修の概要について不安な事柄などあれこれ先輩たちに伺えたし、私はちょっと心配して緊張してたけど、これから面白くなるんだという積極的な興味に変わり、胸が高鳴りました。皆が皆、初めはかなりしんどいと言うし、だけど次第に熱情を持って打ち込む姿勢になるみたいでした。国際親善の交流の場みたいな雰囲気なのよ。多くは英国人だけど、カナダからも何人か来ていたし、アメリカ人もいるし、ユーゴー・スラビアからと南アフリカからとアイルランドからも来ていたし。昨日の見知らぬ人がその場でもう家族の一員になるような、温かな（かなり熱っぽい）人間への理解と愛情とを持った人々の集まりでした。

当面タヴィで参加するセミナーは2つです。その1つ、「Work・Discussion」セミナーとは、それぞれ参加者はタヴィの外で施設やら病院やら家庭でもいいけど、とにかくなんらかの対人援助の場で働いているという前提になって

おり、それについて報告し合い、議論を重ねてゆきます。心理臨床（セラピイ）に導入される以前に広く対人援助のプロとしての見聞が求められていることになります。もう一つ、乳児観察「Infant-Observation」のセミナーでは、各自が担当した赤ちゃんを産後直後から週ごとに継続して家庭訪問して観察を続け、交代でその観察記録の資料を提出し、皆で話し合うというものです。母子関係のなかで赤子の心の発達がどう進展してゆくか、きめ細やかにフォローする眼差しが養われてゆくようなのです。もう目の前が一気にパアーッと、まるで「開け！ゴマ！」の呪文が効いたみたいな感じで、ワクワクでした！

新入生の中にはまだ職を持たない人が何人かいるということでした。そんなことを聞けば、これ迄１年3ヶ月、英国で不本意ながらいろいろやってきたことが結局は得難いいい経験だったと今では思えるし、この幸運に私は誰にどう感謝したらいいものかとふと思った次第です。

それから、トレイニングの必須となる『教育分析』の件ですが、新入生の時から始める人もいるみたいですが、私は２年目に見送ることにしました。どの先輩もひじょうに有意義だって熱心に語るのでしたが。なんと週４～５回のセッションで、１回５０分間で４～５ポンド掛かるんですって！私の給与が手取り１４ポンド(週)ですから、察しが付くと思うけど、ひじょうに高いわけなのです。或る人が英国では賃金が低いので、分析を継続するということはかなり大変なことだって言ってましたが。確かに金の工面というものは頭の痛いことです。私は【ホリス】でフル・タイムで働いている以上、週２回のセミナー受講が精一杯だし、語学力の未熟さも考えて、それから後１年で少しはお金が貯まるかもと期待して、今年は見送る決心をしました。それが今のところ賢い判断だと思ってます。

それから、ローズマリーというちっちゃな女の子の写真を同封します。可愛いでしょ！お父さんのイアンが【ホリス】で夏の間５週間、プレイ・リーダーとして働いてたの。お母さんのビルギッドもひじょうに素敵な方で、お二人とも、ロンドンから離れたところ（ヨーク市）で学校の先生（体育）をしているとか。短い間だったけど、「オーク」の家での彼らとの交流は忘れ難い、素敵な思い出になりました。彼らが去る直前に写真を撮ったのです。なかなかいい写真が撮れて、私は至極満足しています。

いずれ又。　　千鶴子より

1973年9月27日

お父さま＆お母さまへ

今週から「オーク」から「ラーチ」のコテージに移り住んでいます。スタッフが皆新顔揃いで、つい最近の突然の変化で、当然ながら子どもたちはかなり動揺したように覗われます。前任のハウス・マザーは4年以上もここに居たのだから、良きにしろ悪しきにしろ、子どもたちには同情したくなります。かなり酒乱ぎみでいかつい容貌の、かなり年輩の独身女性だったのよ。今の新しいスタッフの顔触れを見れば、今後落ち着けば、うまくゆくだろうと個人的には楽観してます。子どもらは他の家の子どもらと比べてみても悪くない部類で、それぞれに面白い持ち味があって、時には上等の部類だと思う時もあるけど、やはり普通の家庭に普通に育っていないというハンディというものは大きなものです。私は、ここ【ホリス】に来て3ヶ月というものあちこち移動ばかりで落ち

着かなかったので、やっと一年間まあまあ満足して住める所が見つかってほっとしています。ハウス・マザーのジォーン、補佐の人と私とパートで来る女の人の4人がハウス・スタッフで、子どもら13人の面倒を見るわけです。他に2人の掃除する人と1人のパートの料理の人が来ます。仕事は比較的楽です。私はまず自身の身辺を落ち着かせることに主に気を遣っています。1週間近く自分の個室の模様変えに着手し、やっとびっくりするほど綺麗な居心地のいい部屋になったの。研修コースが始まる前にこうして何もかも準備が整い、私は本当に幸運だったと今迄のいろんなごたごたをすっかり忘れようとしてます。

こちらは美しい秋の季節を迎えています。カセットテープの音楽はよく愉しんでいます。それでかしら、よく日本の懐かしい夢をみます。

いずれ又。かしこ　千鶴子より

1973年10月7日

お父さま＆お母さまへ

随分ご無沙汰をしたような気がしますが、私の方、「ラーチ」に移り住んで2週間がやっと過ぎたのですが、身辺が落ち着きません。

ここ、或る種の‘非常事態’なのです。1週間前の日曜日、裏庭の納屋で子どもが火遊びして、大したことはなかったとは云え、屋根を一部燃やしたという事件があったのです。子どもらがおやつを食べ終えて、スタッフはやれやれと落ち着きかけていた時、その隙のことだったのだけど。警察の事情聴取では‘犯人’はついに上げられなかったみたいで真相はうやむやになったけど。私には犯人の目星は付いてる。或る可愛らしい顔のちょっと幼稚なポヤッとした白人の5歳ぐらいの男の子がいて、近頃台所でマッチを弄ぶのを眼にしてたから、私はこれはヤバイと察して彼を牽制してたし。裏庭で焚き火をしたあと、用意してあったバケツの水で片付けるやら火は怖いということを教えてたわけ。それが裏目に出たのかともう内心ヒヤッとしたよ。なにやら歯止めが利かない事態なのかも知れません。

この事件の前の2週間というものは、おっそろしく躾けの厳しかったハウス・マザーが去ってゆき、引き継いだハウス・マザーのジォーンがまだ若くて優しい気質の人で、どちらかというと彼女は子どもたちを不憫に思い、自分は彼らをもっともっと自由にさせたいと思っていた節がある。それだからか子どもがまるでタガが外れたみたいに、好き放題なことをし始めて、まるで手の付けようもない有り様へと事態が変貌していってるの。私は昔のハウス・マザーの頃に一時期手伝いに来てたことがあって、今その変わり様には唖然とし、ここしばらく本当に頭の痛い思いをしました。

今も火事騒ぎの後、皆やや落ち着いたとは言え、10歳頃の男の子2人の難しいのには手を焼いています。悪いことに、男のスタッフが居ず、女4人それも皆若くて、ごく普通の女なものだから、子どもが付け上がっても腕力で抑えられないのが弱味だけど。今朝はこれじゃいかんと腹に据えかねて、11歳の男の子の頬を引っ叩いてやったけど、えらい疲れる思いを後でしました。叩くと、向こうはかまってもらったと逆に興奮し、味占めたとばかり、さらにこちらの注意を引こうと何かしら又やらかすわけ。その悪循環には、もう付き合い切れないのは分かっているし、体罰は到底私の柄じゃない。正直なところ背丈が150センチにも満たない小柄の私だから、あちらに本気で歯向かってこられたら、私なんてひとたまりもないわけ。よく彼らが逆襲してこない

もんだとむしろ不思議なくらい。一応大人の権威というのに盾突かずにいるのは、どこかまだ彼らが子どもで‘甘え’があるからだろうけどね。それに、私たちスタッフが彼らを内心可愛いと思ってるのを彼らが知らないはずもないと思うし。

ハウス・マザーのジォーンはかなり頭の痛い思いをしているみたいですが。経験不足（仕事を知らない）と私は思います。今晩も私がコンサートから遅く帰ってきたら、子どもの居間の窓は開いているし、スタッフの部屋の電気は付けっぱなし、台所はまるで片付いてなくて、戸棚のドアは開き放題という有りさまで。この前なぞはアイロンを付けっぱなしにしていたし、まるで緊張感が無いのには呆れるけど・・。かく言う私も、ミセス・シンクレアの家で仕事を覚えたのだし、知らなければ知らないで済んでしまうことではあるけど。ハウス・マザーとして、センスを欠いているじゃない？実は、前任のハウス・マザーが去った当日の夜、彼女はフレー！って万歳して小躍りしてた。その浮かれた有頂天ぶりを階段の下から眺めながら、些か私は内心危ういものを覚えたのだけど。杞憂が現実になってるわけ。子どもが13人も居れば至るところに危険はあるのだし、私はしっかりと自分の責任は果たすつもりです。

お母さまの言ったように、他人の下で働く以上、どうにもならないことがいっぱいあるのやし。私は気楽にやろうと、ゆっくり構えています。実際、ジォーンは気持ちよくトレイニング・コースへ行く時間をつくってくれるし、参考図書もいっぱい貸してくれるし、上司としては上等な部類です。子どもらは躾けの面で、普通の常識がないこともあるけど、それぞれいろんな意味で（ごく素直にいい子だと思うにしろ、難しくってかなんと思うにしろ）興味深いので、私は退屈しません。私なりに何かしてやれることがなくもないのです。今の状況から逃げ出したいとは思ってません。労働時間は週５日間、１日９時間、週２回の休みですし。もう限界と思う時は、「オーク」の家へ逃げてゆけるし。週２回の夜のコースに、又時たま息抜きにコンサートへ行くとか。それに知識欲も盛んで、専門書は勿論、結構熱心に保育関係の雑誌とかも読み漁ってるのです。

この前、晩の１０時を過ぎて、子どもらはベッドに入って、私は一人で居間でテレビを観ていたら、突然かつて「オーク」の家に一緒に住んでいた男性スタッフ（それぞれが別々のコテージへ移り住んだ）が２人訪ねて来て驚いたの。それぞれ‘施設病’にかかりつつあるという意識があって、たまらなくなって、どうしているかと私を訪ねてきたのですって。皆でしばし屈託から解き放たれようと【ホリス】を逃げ出し、シドカップの駅近くのパブ（酒場）へ行って一杯やって、あとのもう一杯は酒瓶を買ってきて、２人のうちの１人の部屋で音楽を聴きながら飲んだのだったけど。夜の１時まで喋りに喋って、久し振りに気の晴れる思いがしたのでした。他人の２人が私を忘れていなかったということもショックに近い嬉しい驚きでしたし。どこかで誰かとちゃんと繋がっているんだということを再確認したわけだから・・。そして彼らと話しながらも、仕事の上での経験から培われたセンス（うまい子どもの取り扱い）というものを学んでいたことになる。それは煎じ詰めれば、人間としてのごくごく普通の要求・願望・センスというものであるのだけど・・。こういう状況で、それぞれが生き生きとした魅力的かつ力溢れた（実際的に！）人間でいることがいかに難しいかということを思い知らされたのです。

それで人間としての良識やら均衡を保つ意味で何か行動をしなくちゃと背中を押す

気分で、次の日早速、ロンドンの『若竹会』という日本人の社交クラブに加入する手続きをしたのです。外へ外へと気持ちを向けつつあって、そうなると気持ちがグーンと明るく、思うようにならないときも、フン！大したことないわと思って忘れて、自分のことに気持ちを向けることが出来るのです。私はこの頃強くなったと気が付きました。正しく仕事を知るということは大きな喜びであり、自信なのです。この運命をやっぱり感謝しようと思います。タヴィでの研修セミナーは１週間目を過ぎたけど、知るということは素晴らしいことなのだと思ったの。私はますます意気軒昂です！

詳しくは後ほど。　千鶴子より

1973年10月9日

お父さま＆お母さまへ

【タヴィストック】のトレイニング･コースは、さすが世界的な権威であるだけに、アメリカ･カナダ･オーストラリアといった世界各地からトレイニー(trainee)が集まってきており、国際色豊かです。私はただ2つのセミナーに出ているだけですが、精神科医が結構多いみたいなの。ユング派の分析医の資格を持っている人がいたりとか、ひじょうに多彩な顔触れなのです。今週は2週目で、ほんの始まったばかりですが、教官たち、殊にミセス．ハリスの子どもへの理解は真情に溢れ、その的確さには圧倒的に心打たれます。それも日本に居た頃からなじんできた思考方法とは云え、英国へ来て以来味わった散々な苦い経験が、いっそう一筋縄ではいかない人間の複雑な感情への洞察を深めるのに役立ってると改めて得心した次第です。そんなわけでセミナーを楽しんでいると言えます。やはり詳細な事柄では教官の言ってることが今一つ解んない（英語力のせい）という具合になりますけれども。とにもかくにもここに至って、これ迄の道のりを無駄どころが必要不可欠だったと思えたのは安堵です。ここに至る迄の自分の決断力･実行力を振り返り、今ようやく素直に自分を肯定できる気持ちになっています。

「ラーチ」での生活も、ひじょうに興味深い体験と言えます。時間内に自分の洗濯が出来るぐらいの余裕があるのですから、かなり気楽にやっていると言えます。今日も、ジォーンが子どものための音楽のレコードをわざわざ聴かせてくれました。毎日毎日いろんな事があっても、私は随分タフになり、それほど疲れを感じずにおります。この歳になっておかしいけど、やっぱりいい両親を持ったことは大きな心の支えです。

かしこ　　千鶴子より

1973年10月20日

お父さま＆お母さまへ

果物の美味しい季節になりました。特に葡萄はすばらしく美味しく安いのです。先日、あまりに大粒で美味しそうだったので、ベルギーからの葡萄を買っちゃったのでしたが。我が家の玄関先の葡萄棚にもこんなふうに葡萄の房が垂れていたなって想い出し、家へ帰るということの喜びを失われていることの寂しさをふと思ったりしてました。いずれ熟した葡萄を刈り取り、お父さまとお母さまがワインづくりに精出すことでしょう。私が帰国する頃には熟成して、いいワインになってるかな。愉しみなことです！

ところで先日、子どもらを引率して映画館へ出掛けてきました。その折の映画鑑賞というのが、子どもらのリクエストで「007」シリーズものの一つで。彼らは2度目らしい。それが勧善懲悪のストーリーなのは解かるけど。善玉はとも

かくとして、悪玉の登場人物が猛烈にグロテスクなの。でっかい画面上に繰り広げられる暴力シーンに辟易して、どんどん気分悪くなって、私はついに中座してトイレに逃げ込んだような始末。座席に戻って、ふと隣に座っていた幼い兄妹で３～５歳程度だけど、へッチャラな顔して眼がスクリーンに釘付けになってるの！我ながら己の神経のヤワなのには呆れたよ。でもどっちかと云えば、私の方がまともで彼らの方がおかしくはないかしら？！どう思われます？

それから、最近胃の調子がおかしいので静養が必要と思い、休日に「オーク」に部屋を取ったのですが。やっぱり静かな時が過ごせるということの喜びは譬えようが無く、この頃頓に「ラーチ」が荒れ放題に荒れてゆくようで、まったく住めるとこじゃないという懸念が少しずつ強まっているのです。他の男性スタッフが＜あまりに気張るな。そのうち自分がハウス・マザーになれば、自分の好きなように出来るんだから、気張らずにリラックスしてろ＞って言ってくれたけど。まったく私は必要以上に忙しく働かないことにしました。どうせ１年間のことだし、リラックスして、子どもらを観察していても得るものは多いのですし。自分の体を考慮し、必要以上に煩わされないようにと考えています。いつぞやのお母さまからの忠告もひじょうに意味のあるものでした。今も子どもらとテレビ観ながらこの手紙書いてるのよ。

ところで、先日過分な額の送金を頂戴しまして、お蔭さまでタヴィストック・センターへの本年度の授業料の払い込みを済ませました。感謝しております。すっかり安堵しました。今のまま、ここでしばらく落ち着くことを考えています。日本の夢を夜見るのが本当に嬉しいのです。

かしこ　　　　　千鶴子より

1973年10月26日

お父さま＆お母さまへ

「ラーチ」の子どもらが時折ラーメンをねだるので、先日休みの日に、ロンドン中央の中国人街へわざわざ買出しに行きました。日本製のものもあってごっそり買ってきたのでしたが、これで‘エビで鯛を採る’算段です。つまりは、ラーメンで私の言うことを聞くように、子どもを躾ける（操る）わけです。この頃は子どもらも扱いやすくなりました。初めの頃はまったくの無法状態で、私が叱っても全然へッチャラな様子でしたが、この頃は一応ビクッとするようになってるので、私もかなり威厳があるようになったみたい。実際きめ細かく子どもの衣服や食事など注意深くみてやっているのは私なのであって、子どもらはそれを感じつつある様子ですし。言うことを聞かない子どもに私が手こずっている時など、他の子らが私に加勢をするようになってきたし。昔は食事時間はまるでめちゃくちゃ、好き放題に食べたり食べなかったりでしたが、この頃は私がきちんと監視して、子どもを椅子に座らせておいて、一人一人食べ物をやるとか、私の許可を得ずには好き勝手に食べてはいけないとか、そうした細かいことが少しずつ徹底してきたようです。私は子どもに仕事をやらせるのはあまり熱心ではなく（子どもがいつも嫌がるもので、やらせようとしては口論になるのでバカバカしい）、さっさと何でもてきぱきとやって、いかに私が忙しく働いているかを示したら、この頃は抵抗せずに、皿洗い程度のことだけど、手伝うようになってきました。他のスタッフはどうも頼りにならないという気がする。実際全然忙しく働かないわけ。昔からこのコテージにいる料理のおばさんが怒っていて、私によく「働くな、他の者にやらせろ」って、けしかけるのよ。でもまあスタッフ同士、適当に仲良くしてます。

いつも子どもらを怒鳴ったり、あれやこれやと神経遣うし、心労でかしら少し胃の調子が悪くなったみたい。「オーク」に部屋を貰って、休みの日はゆっくりと休養に努めることにして、読書やらレコードでクラシック音楽など聴くなり、のんびりと楽しんでいます。今日は若い者たちのパーティがこれからあります。ここでは気分的にゆったり出来てます。では又。　千鶴子より

. . . . . .

1973年10月30日

お父さま＆お母さまへ

今日は日曜日で、タヴィで夕方セミナーがある日ですが、仕事は休みの日なので「オーク」で昼食をとった後、珍しくふわふわーっとくつろいでいるところです。

実は何やもうほっとしています。というのは、ミセス・アダムズが2，3週間の休暇から昨夜戻ってこられて、昼食の折に＜「オーク」へ帰ってきたの？＞と訊いてくれたの。それで、個室をいただけることになりました！「ラーチ」へ移った時点では、見習いの若い学生たちがどさっと【ホリス】に来ていたので、ミスター・シンクレアから半強制的に「ラーチ」へ移ることを要請されたのでしたが、現在ではまるで空き家みたいなもので、ミセス・アダムズは私が戻ってきたのを喜んでくれているみたいなのです。私はそもそも「オーク」へ戻るつもりは全然なくて「ラーチ」へ移ったのでしたし、そのつもりで子どもらと家族の一員のように思って、なんとか懸命に頑張ったと思います。

恐ろしく狭量なハウス・マザーが去って、彼女は4年間も居たのだから、それなりに家族的な均衡があったと思う。今やその均衡は崩れ、まるっきり無法地帯のような有り様で、ついに納屋から火事発生するという事件があって以来、もはや神経の休まる思いのするときはなく、悪いことに私の部屋は廊下の真ん中にあって、両端の廊下の扉は防火のためにいつも閉めておくようにと当局からも言われてるの。それだから子どもの扉の開け閉めの度にバーンバーンと頭を殴られるようで気持ちが全然休まらないの。朝は早くからドダバタと廊下を駆け回っては喧嘩の種を売り歩く子がいたり、夜は寝たくないと言って押入れの隅へ隠れるやら、わざと声高に歌うやら、一々そうした事態を収拾させるのにどんなにエネルギーを消耗したか解んない！

そしてついに或る朝、クローク・ルーム（靴やらコート類をしまっておく収納庫）が水浸し状態で、なんと床にあった靴やら鞄やら教科書がビッショリ水に溺れている具合になっているのを見たときにはまるでヒステリー寸前といった心境でした。ジョーンは、最後の子どもが2階の寝室へ行った時は水道の栓は閉まっていたと言うけど。それは9：30pm であり、実際に子どもが寝静まったのは10：30pm なのです。8：30pm から2階の共同寝室で子どもらは遊び騒いでいるのを鎮めようと頑張ってたのは、時間オフで休んでいた私なのであって、彼女は知らないのです。或る子が10時過ぎに突然歯を磨くと言い出したので止めたのでしたが、下階へ降りていったのかも知れない。真相はついぞ判らずじまい・・。

それやら、なんと窓ガラスは割れるし、庭の垣根は蹴っ飛ばされているし、子どもの諍いは絶えないし、もはや落ち着いて人間の住める状況じゃありません。ジョーンがそれをなんとかしようと臍を固めるのじゃなければダメなのです。彼女は時折遣るせなくなって夜泣くと言うけど、どうも子どもらに舐められているという感じなの！私は子どもには出来る限りの親切はするけど、食事を与えないとか、引っ叩くとか、最後の締め

括りはきっちりして、子どもに文句を言わせないように躾けてます。他のスタッフは疲れてボォーとしてダメになり、料理のおばさんも胃を悪くして来なくなりといった始末です。私は「オーク」の家に居を移し、毅然として自分の生活を守ろうとしてます。では又。　　千鶴子より

1973年10月31日

お父さま＆お母さまへ

今さっき10時半に仕事を終えて「オーク」の家に戻ってきて入浴を済ませたところ。もうすっかりへとへとに疲れているのに、まるで書かんならんようにして両親宛に手紙を書くというのはおかしなものですが。本音を言えるのはやはり日本の家族だけというわけなのでしょうかね。

益々ここの生活がしんどくなってきているのです。どうも胃を悪くしてから、からだに踏ん張りが利かないようで、極力自分を大切にすることに努めています。それで「ラーチ」でも、私はかなり態度が変わってきてます。子どもらにあまり手を掛けなくなって、怒鳴らないようにしたり（胃に悪いから）手加減してます。ジォーンはいい人だけど、もう一つ子どもの躾けとか決まりについての考えが曖昧なので、子どもらに振り回されている感がします。私がそれじゃいかんと思って、あれこれ言うと、ジォーンがこう言ったああ言ったと言い募り、子どもらは好き勝手をやりたがるので、私もどうとでもなれという気になってきました。実際、私が当番の時は、食事でもきちんと纏まり付けて食べさせるのに、他のスタッフだと、まるでメチャクチャで、立ち回るものがいたり喧嘩する者がいたりの騒々しい落ち着かない食卓風景になるのだし。脱いだ服はきちんと片付けろと言ってやっても、他のスタッフはそんなことに注意してやるわけじゃないのだし。いつもいつも靴やら服やら乱雑に放ったらかしになっているので、いつもいつも私がきちんと片付けてやってたけど。結局は何がどう変わるわけでもなし、根負け気味というか、なるべく見て見ぬ振りするしかないみたいです。子どもらの汚しようは凄まじく、本当の意味でのプライバシーが無いからでしょうが、物の有り難味とか大事にするということをまるで知らないのです。ジォーンはこの頃、子どもの汚した跡を見て、子どもを叱りつけているけど、子どもは彼女を甘いと見てるから、全然堪えないの。子どもがロッカーをぶち抜くとか或いはひどい汚し方をしたとて、何も私が一人で息巻いて怒ることもないと放ったらかしておいて、ひたすら針仕事やらアイロン掛けなど一人でやれることに精を出しています。ちょっと今は子どもと口論するエネルギーが無いというか、消耗しないようにと抑えているのかも知れない・・。

問題は、こうした私の職場での深刻な事態について本来ならタヴィのセミナーの場に持ち込んで皆で討議出来たら何らかの助けになるのかも知れないけど。あまりにも自らの非力・無能ぶりを曝け出すことになることが剣呑に感じられて、誰にも話したりなぞ出来ないという思いが募り、いっそう惨めになるばかりなのです。それでこの際ようやく覚悟を決め、スーパービジョンをタヴィの教官にお願いすることにしたのです。此処での情況がよりすっきり把握できたらいいと思うの。完全癖のある私が、こういう状態で適当に手加減をするということに何か割り切れぬ思いがしているのかとも思う半面、子どもは問題を抱えているだけに観察している分には面白いし、私は自分の勉強を大事にしてゆく上で＜ここで得るものは得なきゃ・・＞と至って自己本位に考えています。かしこ　　千鶴子より

1973年11月4日

お父さま＆お母さまへ

もう１１月ですが、草も葉も枯れてゆく季節というものは何となくもの悲しいものです。この頃の朝や夕暮れ時は霧が立ち込めて、人はうっとおしいと嫌がるのですが、私はその風情が好きです。昨夜タヴィのセミナーの帰り、シドカップ駅から【ホリス】へ辿る道筋はすっぽりと霧に囲まれて、路上の車には気を付けんならん（死なれん！）という現実意識のほかにどこまでも彷徨って歩いていたいという思いがしたぐらいなのです。留まりは「オーク」の家へ無事戻りついて、居間の暖かいストーヴの側でテレビを観ておりました。

すると、「アカシア」というコテージに居る男性スタッフの一人が息抜きにやってきて、お互いにどんなんやということになって、話に花を咲かせてたのでしたが。彼の家の場合、しょっちゅう外へ出歩いていたハウス・マザーが去った後、後任に経験豊かな、しっかりしたハウス・マザーが来て、彼が言うのには、彼女からひじょうにいろいろと教えてもらっているということなの。だから全然不満（問題）もなく一応順調に行っているわけだけど。私のとこの「ラーチ」の場合、何ともはや、ひじょうにその逆方向に行ってる。つまり子どもがボスみたいにのさばっている感がしなくもない。彼が言うには、＜子どもは誰もボスになりたいものはいない。～～したいと言った時、ＮＯ！（ダメ！）と言われることで、ほっと安心する（支えられたという思い）ものなのだ。とにかくスタッフが明確な姿勢を持つことが必要なのだ・・＞とやら、いろいろと問題点を指摘してもらったのでした。

それで憶うに、確かに大人も子どもたちもだけど、皆が皆自分がボスになりたいとしのぎを削ってる。そこには、誰かに自分が抱かれて養われることの、つまり‘子どもであること’の安心が無い。ついでに言えば安らげる‘親なるもの’の不在というか、寒々しいわけ。振り返って私の育った環境はといえば、誰もがいろいろな意味で私を慈しんでくれたし、期待をも掛けてくれたじゃないの。私もそれに応える態度を持ち続けていたし。幸せな子ども時代があってこそ、大人になることへの期待感が悦びになるはず。そうした人と人との結びつきの基底にあるべき信頼が此国の人々に欠損している。寂しい限りなの。

それから、ここでもそれぞれスタッフがより良い職へと次々に変わってゆくのは驚くばかりです。前述の彼も、ここでの経験はもう充分だからという理由で、次の職（新しい経験）を探しています。そうした経験を積み重ねて、この社会でより大きな力（責任能力＋経済力）をものにしてゆくわけです。「ラーチ」の家でも２人スタッフが去る予定です。２人ともより良い将来の設計があっての行動だし、私自身もチャンスが来るのを待ってる身だから、そんな周囲の人々の動向には敏感になっています。かしこ　　千鶴子より

1973年11月13日

お父さま＆お母さまへ

現在、ロンドンで就職するための交渉をし始めて、連絡を待っているところです。子ども病院の精神科病棟の保母の仕事なのです。専門雑誌の求職欄で見つけたのでしたが、受け容れられたらいいなと祈ってるところです。

ずうっと前からあちこちの雑誌の求職欄を見てたのだけど、なかなか自分に合った職ってないものです。今の仕事は毎週１５ポンドも貰えるのですし、次のがきちんと決まるまで【ホリス】を去るようなバカな真似はしませんけどね。

でも、この頃の状況判断からして、結局は【ホリス】を逃げるが勝ちと結論づけています。一生懸命奮闘したのは初めの頃のみで、近頃はまるで適当に振舞ってます。子どもらに対してもいずれどうせ去るのやし、自分を印象づけてもどうせ後で逃げられた思いを残すとしたら、それもむしろ憐れと思って、適当に距離を保ってます。ジョーンという気のいい人柄に子どもらが慣れてゆけば、この事態は収束すると楽観していたけど、それがなかなか厄介至極なの。ここ「ラーチ」の乱雑さは募る一方です。子どもらは食べるのは好きなだけ食べるけど、もののけじめはありゃしないし、窓ガラスやら家具を傷めたり、食べ物を遊びに使って大量に無駄にするとか・・。私の神経ではおよそ我慢できませんので、見て見ぬふりをしてるけど。やっぱりそうした‘無法状態’というものは自ずと神経が麻痺してきます。

昨晩も子どもらが追いかけ回って、台所で茶瓶を相手にぶつけたのか、台所いっぱいに茶殻がぶち撒かれてあったけど。私は＜あら、まあー！＞と言っただけで、他のスタッフと子どもに片付けさせて、手を貸さずにいました。制限内で遊ばした後の後片付けはしてやるけど、他のスタッフが制限無しに好きなことをやらした後片付けを何で私がせんならんかと思うのです。私はご免だというスタンスでおりますわけ・・。

折々に「オーク」で他のコテージに配属されている若いスタッフらと話しながら、この事態において何がどう問題なのかということの洞察を得て、いずれどのような結果を生むかを冷静に見守っていたのですが。そしたら案の定というか、先日‘事件’が勃発したわけ。一人の子どもが原っぱでなんと煙草がぎっしり詰まっている鞄を見つけて、それを持ち帰り、他の子どもらにばら撒いて、翌日に学校でも友達らにばら撒いたのです！それは私がタイム･オフの時のことで。久し振りに「ラーチ」へ戻ってみたら、小さい子どもがどうも変な臭いがするじゃないの！しばらくしてもう一人子どもが頭痛を訴えたので、これは変だと気付き、どうにか問い詰めて、やっと皆が皆、裏庭でこっそり煙草を吸い、その鞄の中身の半分をも越える量の煙草がなくなったことの顛末を子どもらが話すじゃないのさ！もう気が動転したよ！即刻警察に通報され、一騒動だったわけなのですが・・。スタッフの誰もが迂闊にもこの事態に気付かなかったなんて心底呆れた！

おかしなことに、今「オーク」の家に住んでいるのは Mr.＆Mrs.アダムズ夫妻と私、そしてもう一人女の子だけなの。5ヶ月前はいっぱい居たのに・・。それから、先月は４人もハウス･マザーが【ホリス】から去り、今月は２人もハウス･マザーが去ったとやら噂聞いてるのよ。それに、「ラーチ」でも２人スタッフが去った後、誰も代わりが来ないの。近々一応新しい補佐の男の人が来ることにはなってるんだけど。４０歳も過ぎた独身男性で、その面相からして私は彼に好感を持たなかったのだけど。「オーク」で一緒に暮らしてる女の子の「ウィロー」という家では、補佐の人がハウス･マザーと揉めて家出したんだとか・・。いろいろともうたくさん！物事の歯車が狂ってゆくみたいで、もう恐ろしいの。そろそろ潮時がきたようです。【ホリス】に骨を埋めるつもりは元々ないし、心中する気なぞ毛頭ありませんわけで･･。

それでも何かと日々は緩慢に過ぎてゆく。嬉しいことが一つ。明日からレズレイという女友だちのご自宅に招かれて、子どもの歌や遊びについてのレッスンを受けるのよ。それはすごーく楽しいのです。私は大丈夫です。どうぞ安心していて下さい。 では又。　　千鶴子より

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

1973年11月16日

お父さま＆お母さまへ

就職の件で、頭をいっぱいにしているので、ふと思ったのだけど。日本ではあまり職を変えるということは好ましくないこととされてるのよね。いつぞやのお母さまの回想のように、日本では何十年も同じところで歯をくいしばって頑張る、どこまでも現状の中で賢く自分を売る術を会得してゆくわけです。お父さまの場合だって、思えばいっぱい意に沿わずに耐えてきたということがおありでしょう。いわゆる日本の「終身雇用」ということだけど。英国の或る労働組合の仕事に携わる人が日本を羨ましがって言うに、＜年を経るごとに給料が上がるというシステムはひじょうにいい＞って・・。実際に此国では、次々に、ほんの少しでも高い給料の地位を求めて転職しなきゃ、自力で家庭をそして子どもの教育を保証してゆくだけの賃金を手に入れることが出来ないわけです。そうして自分を売り歩いてゆかなきゃ、誰も親切にどうこうしてくれるわけじゃない。底辺層の生活的困苦、それに、志を抱き上昇志向の強い者ほど、階級という壁を越えられない‘頭打ち’って実情は誰しも心の内では苛立ち・無力感に苛まされていないはずもない。よくも暴動が起きないものだとむしろ感心するぐらい。

英国は社会保障の発達している点、日本より（学問的に）優れているということを聞くけど。実際には、日本人特有の、あまり理屈でどうこう考えずとも、カンであちこちと切り裁いてうまくいっているという現象が日本の社会全体のあり方に窺われます。結局は自分の身の置き所の問題だけど。此国のこうした階級社会では、競争心の強い、権力を志向する者にとっては或る意味でいいかも知れないけど。こうした熾烈な競争に晒される絶えざる緊張感ってのは、私は慣れたとは言え、ぞくぞくとファイトが湧くというような肯定的な気持ちについぞなれません。確かに他の人が新しい経験やら可能性に期待を寄せ、前進してゆく姿にはちょっと面白いなと感じることがあるのです。しかしながら、我が身を振り返れば、ちょっと疲れたなって思わないこともないのです。１年と5ヶ月、此国の生活には慣れたとは云え、就職の件では難儀をしています。先日応募した「こども病院」の保母の仕事も、保母の資格がないとの理由で不採用だったのです。

ところが、今日の雑誌の求人欄にひじょうにびっくりするのを一つ見つけたのです。「タヴィストック・センター」の付属の情緒障害児のためのクリニックでの保母の仕事です。いろんな点であまりに自分の求めていた条件にぴったりなのでちょっと信じられない思いです。応募してみるつもりです。１月からの空席なのですし、採用と決まっても来年からとなります。今の仕事は不満はあっても得るものが大いにあるし、将来の大きな一つの資格となるわけですし。「ラーチ」の事態が落ち着くまではここでもう一踏ん張り頑張ってやってゆこうと思ってます。

では又。　　千鶴子より

1973年11月23日

お父さま＆お母さまへ

今晩初めて、待ちに待ってたスーパーヴィジョン（Private Supervision）のセッションの第１回目を受けてきました。タヴィの最寄りの駅は「スイス・コテージ」で、そこから3つ北の「キルバーン」という駅近くにお住いの Mrs. Margaret Rustin（ラスティン女史）のご自宅をお訪ねしたのです。先ほど１１時過ぎ、ようやく「オーク」に辿り着き、温かいお茶を飲み終わったところです。

夕方のタヴィでのセミナーの後でしたから、ちょっと疲れましたけど。なかなかの手応えでした。ラスティン女史の英語は抜群に高級なので、私には時折解り難いことがありましたけど。居間でお茶をいただきながら、くつろいだ雰囲気で、でも何やら日本でいうなら伝統的な家元制度の師匠と弟子との関係みたいな趣きがあり、真摯さと厳格さとが入り混じってビシッと決まっているものがあるわけ。思考が洗練されているってのは心底感嘆するばかりでした。それで1時間、今の児童養護施設【ホリス】の現状を話しながら、いろいろと示唆をもらったわけだけど。結局は今の経験もセラピストとして成長するのに大いに貴重なるものだって思いを新たにして、やっぱり疲労困憊したからといって投げ遣りにならず、ベスト（誠意）を尽くさなきゃって、心を引き締めて戻ってきた次第なのです。何やら心の内底に‘プッシュ’が加わったみたいなのよ！

人は‘無意味’では生きられないものなのだとしみじみ思ったわ。この世の中の殆ど総てが実に茫漠として意味不明に陥っているけど。誰かがそうした‘訳がわからない’渾沌とした事象一つひとつに関心を向け、寄り添うことで俄然‘意味’が回復されるということがあるんだわね。好奇心とかやる気もまた賦活される。まるで身動きできずにいたのが、あらっ動いた！って感じ！それがスーパーヴィジョンの要諦だということを実感したのです。こうした姿勢・眼差しが伝承されているのが実に「タヴィストック」なのだと改めて感服しました。得難い経験をしてる。感謝していいとつくづく思ったのです。

タヴィでのセミナーの帰り道に最寄りの地下鉄までいつも一緒に歩く同期生の女性がいて、彼女は「こども病院」で保母の仕事しているの。大学で社会学を専攻したって。とにかく研修1年目ってどこか観察されているっていう窮屈な思いがあって、セミナーでも緊張感はやっぱりあるわねえって話してて。2人で、まあそんなことは忘れましょうって笑いあったのだけど。若いって言えるのは、私とこの人ともう一人カナダから来た男性で、あとは中年以上の人ばっかりなもので。皆とてもいい人たちだけど、どこか‘差’を感じるのはどうしょうもないのです。私も、おっかしな話だけど、早く年取りたい！年取ってゆくことが愉しみみたいにふと思ったのです。そして願わくば「タヴィストック」の伝統に列なりたい！

とにかく長い道程なのですし。これ迄も誰にどうしろと示唆されたわけでもなく、一人で考え、判断し選択し行動しての連続だったわけで。危なっかしい思いをしつつ、それでもこうして一応現在の自分に満足出来る状態までに来れたことには不思議な感慨を覚えるのです。

では又。　　千鶴子より

1973年12月6日

お父さま＆お母さまへ

先日応募した《児童ガイダンス・クリニック》からレターが来て、14日の午後に面接を改めてしたい旨を伝えてきました。初回面接では所長のご婦人との簡単な会話があり、そしてセンター内部をご案内いただき、応募者がたくさんなので後ほど連絡するとのまるで簡単な扱いを受けたので、向こうもあまり気乗りしない感じかなと、私もあれこれ考えて、複雑な思いでいましたが。タヴィストックの入学許可の際も、保証人から推薦状を取り寄せるとか、ひじょうに慎重に時間を掛けたし、私は半分期待して半分期待しない方がいいだろうなぐらいに思っていたんだけど。次の面接は金曜の午後なので、たぶんスタッフ・ミーティングで他のスタッフとの顔合わせ

とか仕事の内容についてのあれこれ説明やらあるのかな。だとすれば、かなり本格的に期待していい方向に向かっているようにも思われます。

そこでの仕事の「アシスタント」っていうのは実際教師の助手みたいなの。子どもに学科を学科として学ばせるのではなく、グループワークの中で、徐々に集中力を持たせてゆくとか、なかなかいろいろとアイディアを搾り出さなきゃなりません。他に精神科医、セラピストとか、教育心理学士とかいろんな人との共同体制の中での仕事で、他の人との給料の点で比較すれば、格段の差があることだし、他の人以上に気張って一人前にやろうとしなくても、リラックスしてやれたら最高に学べる場になるかしらと期待が膨らみます。

但し、今の状況の良い点、住と食を全然心配しなくていいし、夜「オーク」でいろんなスタッフと会って、若いもの同士気楽に話し合えるということやら、それに5ヶ月以上も居れば、【ホリス】でいろんな顔見知りが出来て、ちょっと外を歩けば挨拶しあう人間関係にやはり愛着もありますし。そういうこと総てを捨てて、またまた裸一貫、白紙に還るわけで、大丈夫かなって一抹の不安を持たなくもないのです。でも、このままではいかんと奮い立たせ、更なる自立へ向け、ステップアップしてゆかなきゃと自分に言い聞かせています。

今日は10人の子どもらを引率してロンドン中央へ繰り出し、劇場で子どものための演劇『ピーターパン』を一緒に観てきました。やっぱり英国のいろんな経験が珍しくて、面白いと思うことがあるし、私は退屈してないし、大変な思いをしつつも、自分の求めていっているものに近づきつつあるような充実感があるのはひじょうに幸せなことだと思うのです。

日本の世情も大変みたいですが、英国も石油ショックの件を始めとして、交通マヒ・住居問題と、まるで誰もが憤っているというような難しい状況です。クリスマスが近付いても人々はあまり笑顔をつくれないみたいです。

かしこ　　千鶴子より

1973年12月14日

お父さま＆お母さまへ

今日、例の就職の件でインタヴューがあったのですが。3人ほどの候補者を5人のスタッフが面接するという具合だったのですが。結局私は選ばれなかったのです。初回面接の時もそうだったけど、やっぱり日本人ってのはひじょうに向こうにとって不慣れな人種のようで、私としても、ひじょうにちぐはぐな印象を受けたわけです。センター長という年輩の女性が面接時に私に言うのよ。私が履歴書からタヴィストック・クリニックのセラピイコースの研修生なのを知っててなのだけど、＜貴女の国・日本は家族主義の国なのだから、精神分析は要らないのではないか？＞と訊くわけ。私の存在をバッサリ全面否定してるわけだもの。もうガッカリしたよ。根が慎重だから、それに多少小心だから、向こうに迷いがあれば、それを押し切る強さを私は持てず、結局は無駄足を踏んだに過ぎなかったことになって。場数を踏むという点でいい経験だったかも知れないけど。‘人種的偏見’と声高に言うことではありませんが、まだまだ日本についてはその程度の理解なのかとひどく傷ついてしまったの。早く忘れてしまいたいことですが。今の状況から一日も早く脱したいと気持ちが焦っていたので、転職できるのを強く期待していたんだけど、致し方ないわね。

でも、一応住む所もあって、お給料も貰えている、この状況を捨てたわけじゃないのだ

し、又次の機会を待つしかないのですが。どうしたらいいものかと思案に暮れてます。毎週出る雑誌の広告欄に、また気を配ってゆくしかないでしょう。就職に当たって、女であるということはここでは全然ハンディにならないのですが、外国人であること・独身であることなど私の今の状況では、どうしても一人前扱いされない憾みがある。タヴィストック・クリニックのトレイニー（研修生）という身分があるだけまだましと云えましょう。

ここでしばらくペンを止めて、考えに考えた挙句、結局あの職は私の本当の望むものじゃないということ、私はサイコセラピイ以外の仕事は断然したくないのだという考えにどうやら落ち着いたのです。

ということは・・想い出したのだけど、Dr.カーベルの紹介で、St.George’sHospital でサイコセラピストの募集があると知らされて一応応募してみたら、此国に来て間もない頃（１年半ぐらい昔）J.さん宅にホームスティしていたところに主任の Dr.Walk から面接の件でご連絡の電話が入り、私はまだ準備がないからとわざわざお断りに出向いていったわけ。その又いつかの準備のために（別にその病院へ行くとは決まってないけど）、思えばオペアもし、ナニーの仕事もし、今の児童養護施設の仕事もしてるわけだったのですから。問題のポイントは、英語力の研鑽と此国の社会事情の精通することだったのでしたから、今やそれに近づきつつあるのですし、まったく希望を捨てる理由は全然ないのです。実際保母の職は、給料が安いので、とてもアパート住まいするだけの経済的余裕はないだろうと察せられるし、今のここ「ラーチ」の状況は子どもの問題という観点から言えば、一つの‘実験室’みたいなもので、あまりどうしなきゃなんないと憤ってみたりせず、冷静に観察していれば、得るものは多いにあると言えなくもないのです。そこであれこれと、他の養護施設の仕事やら保母の仕事に格下げして‘身売り’して歩くのは逆によろしくないと思うわけです。きっと本当の意味で、サイコセラピストとして病院で働けるだけの自信を得たあかつきには行動開始しようと決め、しばし就職活動は棚上げにすることにしました。勿論.ラスティン女史にもそうした経緯やら心積もりやらを逐一報告して、今後ともそれ相応の必要なアドヴァイスを得るつもりです。要は、いろんな意味で全てが私の成長の糧なのですから・・。

ところで、今日はまったくひどかったよ。鉄道のストライキでここ１週間、ロンドンとその周辺の交通がひじょうに混乱しているのはテレビや新聞で知ってたけど。今朝、駅に行ってみたら、汽車は走ってませんと言われ、さあーっ大変！そこでバスでロンドンへ行く方法を教えてもらって、往きはまあまあ3時間近くかかって、ちょっと時間遅れたけど、インタヴューに間に合ったのだけど。帰りがもう大変！ちょうど皆の帰宅時間なものだから、バスは何台も満員通過。またまた地下鉄で一つ手前のバス乗り場へ行ったら、すごい長蛇の列。そこでも満員通過のバスが通り過ぎて、待っても待ってもちっとも番が来ない。やっと空きのバスを都合してくれたらしく、２台目に私は乗れたのだったけど、のろのろとその交通渋滞も著しく、シドカップに辿り着いたら、夜８時前だったのです！往く前朝食にトーストと紅茶とゆで卵を食べたきりで、喉は渇いているし、凍えそうだし（まるで冷凍のチキン！）、それでもこんなにたくさんの人がタクシーに乗らずに頑張っているんだからと私も頑張ったので（当たりまえだけど）えらい！と思って、バス停から下りてすぐ中華料理店に立ち寄り、あったかいスープと焼きそばに野菜を炒めたのを食べて、それからまたまた凍えそうな思いで【ホリス】へ歩いて戻ったのでした。

湯たんぽをベッドに入れて、やれやれ、今日一日はまるで何もかも忘れてしまいたい一日だと思ったけど。ほら石油欠乏だもんで、車もろくに使えなくなってゆくみたいだし、セントラル・ヒーティングは設定温度をちょっと下げられているみたい。それに電燈も電気のストーヴもなるべく使わないように気を付け始めているし。人間の生活もかなり厳しくなりつつあるわけです。その上に鉄道ストライキなもんで・・。私は【ホリス】に生活していたら、あまりそういうこと悩みとしなくてもいいような、他人事にしていられるような感じで、あまり望ましくないとは言え、此処は或種の‘温室’なのだなと悟った次第です。

今日なんて、この「オーク」の家は私の外に住人がいないみたいにひそっとした静けさで、この静寂は本当に有難いのです。Mr.&Mrs.アダムズは階下にクリスマスの飾りつけをしました。とっても華やかです。それから居間のテレビが或る日突然故障しちゃって、新しいのに買い替えるとのことですが、やはりテレビがないと淋しいです。時に本当に有意義なフィルム（映画）があるからです。まあ私は大丈夫みたいです。

ではいずれ又。　　千鶴子より

. . . . . .

1973年12月25日

お父さま＆お母さまへ

今日はクリスマスで、何と言っても、その賑わいは著しいです。私は、24日～27日の4日間休暇です。バーミンガムのケトル家に滞在する予定でしたが、鉄道のストライキではっきりと予定が立たず、ロンドンの発車駅まで行くのにここからバスで2時間以上もかかるわけで、もう面倒だし、延期することにしたのです。現在ロンドンでは、アイルランドの紛争の煽りで、あちこち（特に繁華街）爆弾騒ぎがあって、こうなると【ホリス】に居るのが最も安全だということで、この2日間ひじょうにゆったりと休養しています。明日は、Dr.カーベルのお宅にお泊まりなのよ。

昨日は「ラーチ」の家でちょっとしたパーティが催されました。さらに今日はクリスマスですから、私も子どもらと一緒にクリスマスの伝統的なディナーをいただきました。ターキィー（七面鳥）の肉とロースト・ポテトとキャベツの小さいのと人参の茹でたのといったメニューなのですが。それから勿論子どもらにクリスマス・プレゼントが配られました。あちこちから玩具の寄贈があって、相当高価なものをそれぞれが貰っていました。食べ物は豊富にあるし、誰しもこんな日が毎日続くといいと思わずにいられないぐらい。大人（スタッフ）たちもシェリーとかお酒をちょこっと飲んで、まことにバカ騒ぎをしたい気分で、テレビ番組もだけどそのはしゃぎ様は日本の比じゃないといった感じです。特に現在英国民はひじょうに難儀な状況下にあって、例えばここら辺に住んでいる人でロンドン中央に職のある人は、鉄道ストライキのお蔭で、毎朝・毎夕、往復に2時間以上も掛けてバスで通勤してます。その疲れは徐々に苛立ちに変わってゆくみたいです。当然よね。

今日、クリスマス恒例の女王陛下のテレビ放映があったのでしたが。おかしなことに、子どもがそうだと知るや、チャネルを切り替えろって言うの。ところがどのチャネルも同じ女王の顔が映っていると知るやパァーと散っていなくなっちゃって。まるで人気がないんやなあと呆れたけど。私一人居間でテレビを眺めながら、内心可笑しく思っていたのです。実際、彼女のスピーチといえば、プリンセス・アンの結婚が少しでも国民

に喜びをもたらしたことは大きな慶びですとか、コモン・ウエルス（イギリスを中心とする国家集団）の人々との交わりの中で（そうした社交のドキュメントを放映し）いかにも皇室一家が人民のために働いているといった印象を与えて、かつごくあたりまえにこの厳しい状況の中でひと時、愛と犠牲のキリストの精神を考えましょうという締め括りだったけど。断然生活苦を知らない者の甘言でしかないと思うのは私一人じゃないと思ったわけで。私は内心此地の国民を気の毒に思う。

先日ふとしたことで、スウェーデンに留学中だという経済学の男子学生に会ったのだけど。実はラスティン女史の個別スーパービジョンの後に鉄道ストライキで帰る電車がないと判ってたので、事前に近くのホステルに一泊の予約を入れてたんだけど。そこにたまたま居合わせたその若い日本人男性に会って、面白くってつい夜を徹して喋ってたわけ。日本と比べるとあちらは天国だって言うのよ。もう日本へ帰る気はないって彼は言ってたけど。スウェーデンの話を聞くと、福祉行政が手厚く、国民全般に生活苦のないことは呆れるばかりで、ここ英国という階級制社会が、そうなると、地獄の感がしたのです。

私も昨日、就職の件で問い合わせの手紙を出したばかりで、結局皆が皆、余裕なく生きている社会ってのは時折厭になるのです。最近つくづく思うわけ。日本で苦労なく育って、困ったことに出遭うと誰や彼にきっと支えられてたなんて、此国のこうした苛酷な社会では生き残れない、華奢な人間でしかないということを実感として思い知らされてる。もっと逞しくならんと本当にやってゆけんぞって自分に言い聞かせたのでした。この頃は、自分の経験も客観視できるようになって、態度が少し‘大人的’になってきたかなと思えます。実際日本に居れば出来ないような多くの出来事を経験して、賢く学んでいるわけだし。結局人間というものは、どう転んでも、良くても悪くても人間なんだっていう思いで、私も気長にゆったり構えて生きることにしました。

お正月ってのは、やはり家族と居たいものですね。私も【ホリス】を出て、新しい生活が出来ることを祈りながら、今年も暮れてゆこうとしています。では又。かしこ　　千鶴子より

1973年12月27日

お父さま＆お母さまへ

昨晩、Dr.カーベルのお宅に一泊しました。他に彼女の同僚でドクター（女医）の方が居らして、女３人で至極愉しい晩を過ごしました。Dr.カーベルのフラットは、２つのベッドルーム、それに居間と台所と食堂とバスルームで、簡素ながらも品があり、ひじょうに快適な住み心地なの。丘の上にあって、窓越しの眺望も悪くないし、外に１個ずつガレージがあるのですから、かなり高級感があります。食器からして素敵なのですから、勿論ご馳走の味もとても美味しくって（彼女、お料理が得意とは知らなかったけど）、本当に気持ちが和むのでした。日頃「オーク」の家に居れば勿論まともでいられるけど、一旦「ラーチ」へ戻るとまるでごみ溜めと喧騒の中でだから、食べるものも落ち着いて喉に通らないという具合でしょ。Dr.カーベルとこのベッドだって、電気ブランケットで暖かいし、枕カヴァーも清潔で、花模様の刺繍があるという具合だもんで、気持ちがいいったらないのです。それに彼女は、小物でいろんな可愛い面白いものを蒐集してらして、例えば原石（宝石の）とか、ちょっとしたものでも、話が大いに弾むのです。それに、あちこちへ行った人からのおみやげとか、外国の珍しいものもあ

って、とっても楽しいのでした。私の差し上げた御殿毬も光っていたし。それに今回私からクリスマス・プレゼントした、花嫁さんの和紙人形も可愛くって珍しいお部屋の飾りになっていましたよ。

昨晩はおかしかったのだよ。何して過ごすのか、テレビを観るぐらいかなと思ってたら、Dr.カーベルがいろんな頭脳ゲームやらパズルものを取り出してきて、例えば表が数字で裏が絵になっているのがあって、それを順序よく並べるのに30分近くも掛かって、やっとこさやれたのだけど、私の場合はね。結構頭を使うのよ。他にもいろいろあったけど。例えば「ジグソーパズル」といって、その一つなどはロンドンの大きな地図で、それがこまごまと百やら千やらのピースになっていて、そのバラバラのピースを継ぎ接ぎして図柄をまとめあげるわけ。女３人が真剣に挑戦して５時間以上も掛かったのです。３人とも顔を上気させ、その熱中する様もおかしな具合だったけど。途中軽い夕食を取ったけど、11時過ぎになってやっと完成した時はもう3人とも万歳して喜び合ったという具合なのですから。教養のある英国人の余暇の過ごし方の典型なのだけど。ちょっと日本人には理解しかねる感もある。おっかしいわねえ。Dr.カーベルは、今日病院へ出勤なので、私は明日から仕事始めだし、ゆっくりしたいので、また【ホリス】へ車で送ってもらって帰りました。「オーク」のMr.＆Mrs.アダムズにクリスマス・プレゼントとして、芸者姿の和紙人形を贈ったのですが、ひじょうに喜ばれましたよ。

昔に比べると、この頃では、英国人との交際の仕方も解ってきたので、かなり気持ちに余裕が持てて、気分的にリラックスしています。就職のことも、新しい生活と経験が待ってると思うことで前向きでおります。

いずれ又。かしこ　千鶴子より

1974年1月9日

お父さま＆お母さまへ

あけましておめでとう！お久し振りです。クリスマス前に30名ほどの日本の知人・友人宛にクリスマス・カードを送りましたもので、ここずうっと次々と年賀状が届いて、本当に懐かしく嬉しく見ています。それから先日小包で届いたテープ、琴の音や童謡の調べがどんなに嬉しかったか知れません！誠に有難うございました。

ここ最近まで就職活動に奔走し、日本人であることのハンディを抱えてトレイニングを続けてゆくことの是非やらを考え考え悩みに悩んでたようなことですが。結局多くのものを得て、私はまた一つ大きく成長できたと喜んでおります。幸いにもタヴィストックの教官からのご指導もあり、お蔭で此地を‘学びの機会’にできたことを幸運に思っております。ただ、ここ【ホリス】に骨を埋める覚悟で働いているわけではなく、飽くまでもwork−experience という建前ですから、キャリアの一通過点でしかないというのがあり、どこか本気で腰を据えられないといった問題があるとしても、なんとも致し方ないのです。

ここ「オーク」の家でスタッフの若い者同士、よく夜に集まっては気炎を上げるってことがよくあるんだけど。誰しもが上昇志向が強くて、本音を言うならば＜ここで終わりたくなぞない！＞というわけです。だけど未来は判然としないわけだから、皆それぞれかなり屈託を抱えている。卓球やビリヤードなどで発散しながら、お互いに若く、未知の未来に対して希望やら不安などを抱く者同士、大いに励まし合っているのです。皆と一緒にお酒を私も少し飲めるようになってきてます（甘いシェリーぐらいかな）。英国人の中での付き合いがうまくなったのか、馴れを感じる今日この頃です。何やらやれやれ！の心境です。

が、鉄道のストライキは依然として何ら解決の目途も立ちそうになく、人々の暮らしはひじょうに不安定で苦境に陥っている。私もいよいよロンドン中央への移動を覚悟しました。その見通しは明るいものですし、心配なさらずにいて下さい。此地で１年半も過ぎれば、どうすればいいかの状況判断なり実行力なりは身に付いてきたと言えますし、その意味でも大きな成長と喜んでいるのです。かしこ　　千鶴子より

1974年1月20日　　＝速達＝

お父さま＆お母さまへ

ここ１週間以上もご無沙汰したように思いますが、私はひじょうに元気でおります。身体的にも精神的にも情緒的にもひじょうにいい状態です。どうぞご安心ください。

結末から報告しますと、私は【ホリス】を退職し、１週間ほどホステルに滞在して下宿探しに専念した結果、恰好のが見つかったのです！タヴィのトレイニング･センターに通いやすい地域に下宿を定めようとしたのですが。場所柄誰しも望むところなもので物件探しは予想以上に深刻でした。週８ポンド５０というのでもまあまあなところで、実際はそれでも多分に気の滅入るような雰囲気の下宿というのがごく普通なの。それが私のフラットは週６ポンドよ！３人共有のフラットで同居２人の女性も教育のある、まともな人々ですし。清潔で、家具も良く、温かく居心地が良くて、もうほんとに申し分ありません。一仕事終えたというホッとした思いです。私の他にもたくさん申込者がいて、従って１週間も返事を待たされての挙句だから、もう万歳！をしてもいいぐらいって心境です。ロンドン中央のど真ん中（東京ならば赤坂のど真ん中って感じ！）で、地の利は抜群にいいです。タヴィストック･センター迄通うのには地下鉄で3つ目の駅です。架空ではあるけど探偵「シャーロック･ホームズ」が住んでいたとかいう Baker Street のすぐ側で、リージェント公園も歩いてすぐの処です。私のフラットは４階建てのビルのトップの階で、階下には教育出版の会社が入居しており、万事が申し分なく格調高いわけ。大都会のど真ん中といっても喧騒とは無縁で、４階はひじょうに不思議なぐらいにもの静かなの。下階（地下）のボイラー室から暖かい湯が上がってくるという具合ですし。安全かつ快適な生活が保障されるのです。これって‘お赤飯もの’よ！胸が高鳴ります！

【ホリス】の人たちは、ストライキ（鉄道）が2ヶ月以上も続いて、その解決の見通しも付かない有り様でしたから、誰もが私の退職・移転に納得できるというわけで、全然難しいこともなしに去れましたし。私のロンドンの下宿先が定まる迄手紙やら給料やら（超過手当てとか休暇手当て）は保管してもらっていまして、日本からの荷物もそのうち受け取る手続きをしますので。どうぞご心配なさらずに、万事お任せください。

この１週間、ホステル住まいはひじょうに愉快だったのです。アイルランドからとオーストラリアから来た女の子たちと共同の寝室でしたが、いろんなお喋りして面白かったの！明日、引越しです。新住所を書きましたのでどうぞ！ここに至って、真っ当な自立した生活を迎えられたことはなんと云っても嬉しくって心弾みます。私はよく賢く頑張っていると思う。どうぞご安心ください。ではご機嫌よう　　千鶴子より

（新住所：１２１Gloucester Place,
London, W1, England）